

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

カンボジア農民の「出稼ぎ」と農村ビジネス
—シェムリアップ州農村部における地域振興の可能性—

2015 年 1 月

氏 名：岩崎佳恵
学籍番号：201010354
指導教員：関根久雄教授

目次

第1章 序論-----	1
1. はじめに-----	1
2. カンボジア人の「居場所」概念について-----	6
3. 研究方法と本論の構成-----	7
第2章 「出稼ぎ」をとりまく社会-----	9
1. カンボジア概況-----	9
(1)カンボジアの概観と工業セクターの台頭-----	9
(2)カンボジア農業の課題-----	11
(3)カンボジアにおける人口移動と出稼ぎ事情-----	13
(4)農外ビジネス（OFB）の出現-----	17
2. シェムリアップ州の出稼ぎと都市化-----	20
(1)シェムリアップ州の概要-----	20
(2)シェムリアップ州の人々の暮らしと出稼ぎ事情-----	22
第3章 「留まる人」文脈から捉える農村ビジネスの民族誌-----	29
1. インタビューの概要-----	29
2. 「出稼ぎ」をめぐる人々の選択-----	30
(1)結果として出稼ぎをする人々-----	30
(2)出稼ぎをしない人々-----	37
(3)「出稼ぎ」の正負の効果（経済的側面と心理的・社会的側面から）-----	46
(4)再帰的近代化と農村の価値-----	50
3. シェムリアップ州における農村ビジネス-----	52
(1)シェムリアップ州における農村ビジネスの位置づけ-----	52
(2)グリーン・ツーリズム-----	53
第4章 結論-----	59
1. カンボジア人の「居場所」とは-----	59
(1)「居場所」の一般概念-----	59
(2)相互扶助慣行を中心とした農村の精神-----	60

(3)カンボジア人の内発的発展と「居場所」の構築-----	61
2.「留まる人々」の農村ビジネスの課題と展望-----	64
注-----	68
参考文献-----	73
Summary-----	78
謝辞-----	80

図目次

図 1 カンボジアの地方行政区分-----	6
図 2 カンボジアの概観-----	9
図 3 シェムリアップ州の位置-----	21
図 4 グリーン・ツーリズムの訪問客のタイプとライフスタイルの転換-----	55

表目次

表 1 主要セクターによる成長への貢献度（1994～2004 年）-----	11
表 2 インタビュー団体・対象者一覧-----	72

第1章 序論

1. はじめに

近年カンボジア王国（以下、カンボジア）はめまぐるしい経済発展を遂げており、世界銀行によると、カンボジア全体の貧困率は2004年の53.2%から2011年には20.5%と大幅に低下している⁽¹⁾。GDP成長率は毎年6%前後の伸びを見せ、世界の投資家・企業から大きく注目される存在でもある。また賃金の安さ、他の東南アジア諸国へのアクセスの良さ、平均年齢（人口の半分近くが20歳以下）も大きな経済成長を加速させる要因となっている。国際協力機構（JICA）によると、2013年9月時点での都市化率⁽²⁾は21%であり、過去20年間で比較すると大幅に上昇しており、首都プノンペンを中心とした都市部一極集中型の経済成長は目覚ましい。一方で、農村の貧困問題は未だに解消されていないものも多く、カンボジア政府、国際機関、NGOなどの様々なアクターが貧困削減政策を打ち出してもなお、貧富の差は広がるばかりである。また、農村における雇用機会の創出が、若い労働人口の増加スピードに追いつくことができていない。あるいは現在の農村での生業活動では十分な収入獲得に繋がらず、多くの農民が農村部から国外（主にタイ、マレーシア、韓国）へ、国内では首都のプノンペン、シェムリアップ州中心部などの都市部へ出稼ぎに出ていく。世界銀行による2010年の報告では、年間国外出稼ぎ者数は約35万人、総額約3億700万ドルの収入があり[World Bank 2010]、これは国家経済を支える大きな1つのアクターとなっている。

出稼ぎ農民による農村への送金は、農村家計の大きな生活の支えである。しかし一方で、都市部へ出稼ぎ者は、日雇い労働やインフォーマル・セクター⁽³⁾などの不安定な職に就くことが多く、長期的かつ安定的な仕事に就くことが難しい。例えば、筆者が出会ったシェムリアップ州中心部で働くトゥクトゥク⁽⁴⁾運転手の話では、彼はもともと地元で農業をしていたが満足な収入を得ることができなかった。そのため、家族を支えるためにとりあえず、観光地化が進み、農村よりは職が多いと考えられている都市部に出てきた。しかし、繁忙期と閑散期では乗客数にかなりの開きがあり、学力が低く英語が話せず、外国人観光客とうまく交流ができないため、結局多額の借金をして日々運に任せて生活しているのだという。本来の目的である家族への送金どころか、日々自分が暮らすための十分な食事すらままならない状況であった。彼のよう

に、都市へ渡った者の中には、当初は農村に住む家族を助けたいと思っていたが、実際の仕事は低収入かつ不安定な雇用形態であり、十分な家族への送金ができない人も存在する。その結果、家族に合わせる顔がなくなり、地元との関係が疎遠になったという人もいる。

一方で、地元の農村で暮らしつつ、頻繁に都市部へ出稼ぎに来て、農村での全体収入よりもかなりの高収入を得られる仕事をしている者も多い。1年のほとんどを出稼ぎ先で生活する者もいれば、頻繁に農村と都市部を行き来し、稼いでは家計に還元するという流動的な生活をしている者も存在する。

また、農民は「出稼ぎ」という行為や、その言葉自体に抱く漠然としたイメージを巡って様々な葛藤を抱き、それぞれの暮らしの在り方を選択している。例えば、農村から出ていこうとする者の中には、「出稼ぎ」という行為が田舎の劣等感を払拭し、都市の魅力や憧れを叶えてくれるものだと考える者もいる。しかし一方で、出稼ぎをすることで生じる家族や故郷、同朋との別れ、寂しさに耐えられないと考え、たとえ低収入な暮らしであっても結果的に農村に留まることを選択する人もいる。

財団法人アジア人口・開発協会（以下、APDA）は、2006年に首都プノンペンにおいてインフォーマル・セクターに関する調査を行い、興味深い結果を得ている。それによると、プノンペンのシクロ⁽⁵⁾とモトドップ⁽⁶⁾運転手は、都市部へ移動後、高い所得水準を得られる人々ほどより強い帰村意思を示しているという[APDA 2007:6]。彼らは完全に村との紐帯を放棄してプノンペンに移動してきた労働者ではなく、むしろ、ある程度の所得を確保した後には帰村したいという還流的な性質を持っている。また、同調査では、彼らの都市と農村に対する評価から、出稼ぎ労働者の行動を次のようにも予測している。

人口圧力によって押し出された若年労働者は、インフォーマル・セクターに吸収されていく。しかし過酷な労働条件から、都市に完全に定着する労働者となるのではなく、いつかは年をとって就業機会のある村に帰ろうとする。換言すれば、都市と農村間で労働の配分がライフ・サイクルを通じてなされているといえる[APDA 2007:58]。

このように、都市と農村間の人口移動は必ずしも二項対立的な関係性のもとで生じ

ているのではなく、時期やその時の出稼ぎ者自身もしくは家族の状況に応じて流動的に起こっていると考えられる。そこには、常に彼らを都市へ移動させ、そして農村へ回帰させる経済的・心理的・社会的要因が絡み合っていると考えられる。

出稼ぎによる家計収入の向上は、人々の間で「ジェラシー」という感情を引き起こし、友人や近所の人々との関係性が悪化し、思いやりや相互扶助の精神を忘れてしまう「お金のことしか考えない人」の出現を促すこともある。筆者が出会った農村女性は、姉夫婦が隣国タイに出稼ぎに行っており、姉の存在を次のように語っていた。

「前までは家族や私たちに対してとても優しかったし、みんな姉のことが大好きだった。しかし、結婚して夫と出稼ぎしに行くようになると、お金はたくさん稼いでいるはずなのに、あまり家族に送金もしてくれないし、意地悪になった。考えているのは、いつも『お金』のことばかり。昔と変わってしまった姉に対して、寂しさが込み上げてきます」。

このように、「出稼ぎ」という行為は、正負双方の経済的効果を生む側面のみならず、人々の心理的、あるいは自分を取り巻く社会との関係性を構築する上で、大きな影響をもたらす事象の1つと捉えることができる。

カンボジアは農業大国であり、人々は稲作を中心とした生業活動を営んできた。しかし、低い農業生産性や悪質な土壌環境など、農業を行う上で様々な問題を抱えている。さらに、人々は近代化に伴い、より多くの収入を得ることができる仕事を求めて農村から都市へ移動するようにもなった。隣接諸外国と比較しても農業生産性が低く、その他の代替的な産業もないカンボジアの経済発展のためにカンボジア政府は、農業生産性の向上とともに、地域資源を生かした「新たな産業開発（農村部における地域振興・産業育成）」への積極的な取り組みを目指している。同政府は、国家戦略開発計画、農業開発計画、国家森林プログラムを実施し、持続的な農村開発を目指しており、このような動きは、先の出稼ぎ労働者のような人々が農村から都市へ移動することを防ぎ、地元の農村で安定した職と収入を得るための鍵となりうる。

プログラムを実施する上で様々な国や国際機関、NGO や民間企業などによる農村開発援助、農業生産支援などが行われている。例えば我が国による支援策としては、JICA（国際協力機構）の技術協力プロジェクト⁽⁷⁾や草の根技術協力事業⁽⁸⁾などが挙げられ

る。その中でも特に農業生産性向上や、地域経済活性化、農村住民の収入向上に特化した案件は多く、先の農業セクター戦略開発計画の目標である「農業の生産、多様化、ビジネスを改善する」ための施策が様々なアクターによって実施されている。

また、出稼ぎ労働者が多い都市近郊の農村地域では、低い農業生産性と人口圧力による農地面積の縮小により、米の自給率は低く、自家消費用に米を購入する世帯も多い。そのため、米の販売からの収入がわずかな農民は、最大の収入源を非農業自家雇用に頼ることも多く、出稼ぎ労働による賃金所得や給与所得と、この非農業自家雇用をうまく組み合わせていると考えられる。非農業自家雇用とは、第1次産業以外の産業を自営業として行うビジネス形態であり、APDAが行った調査の例では、酒造、竹製のバスケット製造などが挙げられている。非農業自家雇用の収入貢献度は、2005年にAPDAが行った調査対象地域における米作の収入構成比が3.89%だったのに対して、非農業自家雇用では32.41%と、重要なシェアを占めている[APDA 2007:73-74]。また、非農業自家雇用の例として、ルウィン（Lwin）は、シェムリアップ州のある農村で行われているラタン⁹⁾手工芸品生産・販売の実態について調査を行っている。代々安定した雇用を創出してきたこの産業は、村の伝統と文化を受け継ぎ、かつ観光客数の増加による需要増加で収益増加が見込まれ、農民の生業活動になくてはならない重要な地場産業となっている。しかし、農村外への出稼ぎによる収益と比較すると、原材料費の高騰や新規顧客開拓が困難な点など課題が多くあり、この産業で安定した雇用と収入増加を目指すには、マーケティングや数値的な経営管理などに優れている外部者、ソーシャルビジネスを行う組織による介入の重要性も示唆している[Lwin 2011:82-84]。

このように、伝統的に行われてきた稲作に附随して、農村に根付く地場産業の興隆を促し、現存する地域資源の有効活用などによって、雇用機会の拡大と収入の向上を目指すことは、今後のカンボジア農村における地域活性化、ひいては農村から都市への出稼ぎ労働者を減らし、農村での安定した生業活動という活路を見出す可能性がある。筆者は、これらの農村を舞台とした産業モデルを「農村ビジネス」と定義することにする。本論での「農村ビジネス」とは、もともと農民自身が行ってきた産業活動のみでなく、政府や国際機関、NGOや民間企業などの外部者が関わり、マーケティング力やブランド力などを加えることによって雇用拡大、収入向上、格差是正などのために行われている活動も含むものとする。

今回カンボジアに存在する 24 州の中でもシェムリアップ州を扱う理由は以下の 2 点である。1 つ目は、シェムリアップ州はカンボジアの中でも、特に貧困と呼ばれる地域であり、出稼ぎ傾向も他地域と比べて強い。シェムリアップ州は世界遺産アンコール・ワット群を中心とした観光業で支えられており、他地域と比べても、外国人観光客の増加、建築ラッシュなどの都市化が進んでおり、近年多くの人々が町へ操り出し、農業以外の仕事に就くケースが多い。2 つ目は、外国人観光客の増加に伴い、農村ビジネスによる外国人向けの商品、海外への輸出品を生産・販売しているケースも見られ、今後の農村ビジネスの可能性を検討する上で参考になると考えられる。

カンボジア農民の出稼ぎに関する資料や先行研究は多々存在するが、なぜ彼らは出稼ぎをするのか、あるいは、しないのかという、経済外的要因としての心理的・社会的要因にフォーカスしたものは少ない。その中でも特に本論では、「出稼ぎをしたくない」、「出稼ぎをしたくてもできない」など、結果として農村に留まる人々の内面や背景、彼らの現金収入が多くなることで起こりうる社会における様々な変化を読み取ることで、彼らが農村に留まる意味を明らかにする。また、彼らを農村に留まらせる要因の 1 つと考えられる農村ビジネスの実情や、その特徴や効果を捉え、従来の生業活動以外で盛んになってきた農村での働き方がどのようなものなのかを明らかにする。そして、経済的効果の側面だけでなく、カンボジア人の心理的・社会的特徴を踏まえ、カンボジア人がカンボジア人らしいと思える農村での働き方、そして、シェムリアップ州で有効な農村ビジネスについて検討したい。

筆者が本論で述べようとしている、農村でのカンボジア人の生き方、人々の営み、そして、農村の貧困削減や地域活性化に光を当てるような農村開発研究は行われてきた。例えば矢倉は、カンボジア農村の貧困問題と、それらを解決する上で重要になる国際援助機関による開発援助の実態とその展望などを明らかにしている[矢倉 2008]。またルウィン（Lwin）と山川は、シェムリアップ州農村部における手工芸品生産・販売が重要な地場産業であることを指摘し、農村内で行われている家内産業の現状と課題及び将来性を明らかにしている[Lwin、山川 2014]。しかし、本論のように、農村開発研究を「出稼ぎ」という事象を切り口に展開し、さらに、出稼ぎを「行方不明」ではなく、出稼ぎを結果的に「行かない人」の視点で議論を進め、彼らが農村に見出す価値を十分に発揮できる農村ビジネスを展開する必要性を説き、シェムリアップ州における地域振興の可能性について明らかにするアプローチは、カンボジアの農村開発

研究に新たな視座をもたらすことができると考える。

なお本論では、出稼ぎを「出稼ぎ」と括弧つきで表記する場合がある。これは、いわゆる出身地から外部都市へ現在進行形で出稼ぎを行っている人のみならず、過去に出稼ぎをしていた、もしくはこれから出稼ぎをする可能性があるなどの、結果として出稼ぎをしていない人たちを含むことを意味する。

2. カンボジア人の「居場所」概念について

カンボジアの地方行政制度は三層から成り（図1）、上からカエト（Khet、州）及びクロン（Krong、特別市）、スロク（Srok、群）、クム（Khum、区）に分けられる。憲法上、特別市はカン（区）に、区はサンカットに区画割りされている。この他、非行政単位として、サンカットやクム内に日常生活で重要な集合体であるプーム（Phum）が存在する。このプームは「村」や「集落」というのが訳語に相当し、人々が帰属意識を強く抱く対象と言われる【佐藤 2004:54】。

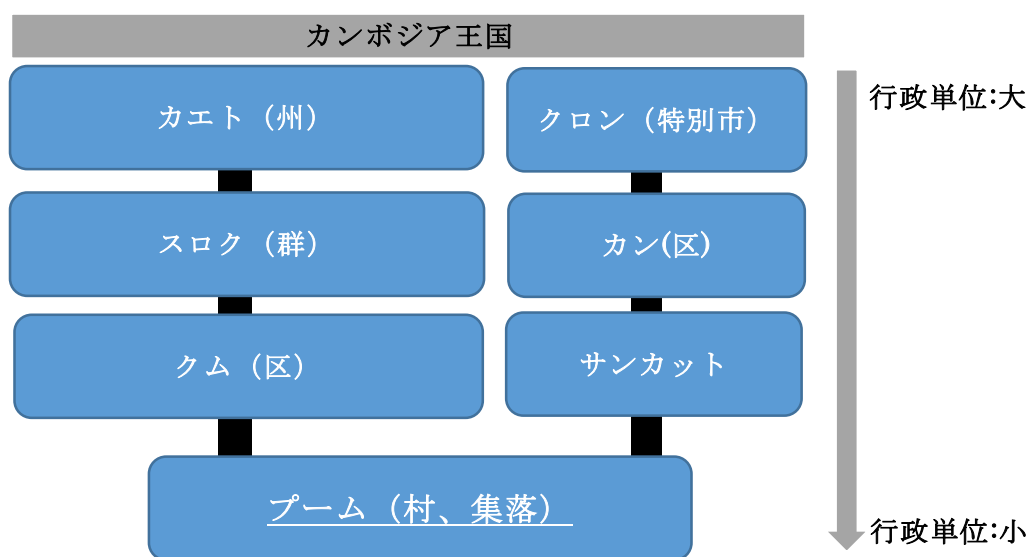


図1 カンボジアの地方行政区分

（出所『カンボジアを知るための60章』より筆者作成）

このプームを舞台としたカンボジアの人々の暮らしや生き方、そして、そこで無意識的に幼い頃から培われる「農村の精神」は、彼らにとって「自分は何者であるのか」というアイデンティティを育むものとして考えられる。時代の変遷や産業構造の変化

などによって、人々の生業活動や、農村での人間関係構築の在り方には常に変化が起こりうる。しかし、この「農村の精神」をベースとした人々との触れ合いや交流が、彼らが生きていく上での心の故郷・拠点とも呼べるような重要な場所を構築し、自分自身と過去・現在・未来、そして家族、親族、友人、地域を繋いでくれる、いわば自分の「居場所」と呼べるような環境を構築する上で必要不可欠なものであると考えられる。このカンボジア人にとっての「居場所」を構築する要素こそが、農村に息づく「相互扶助慣行」であると筆者は考えている。彼らがどのような瞬間に幸福感や充足感を感じるかということは、この相互扶助の有無が大きく関わっているのではないだろうか。

農村に生きる人々が「農村に留まる」という決断を下す理由は、経済的要因のみならず、内面の充足感や幸福感があるからこそその選択だと考えられる。彼らが考える自分の留まる場所、居場所となりうる場所は、互助機能が発達していると思われる場所であり、それこそが農村の重要な潜在的価値であると考ええる。

3. 研究方法と本論の構成

本論は、カンボジアや同国の出稼ぎに関する先行研究、JICA、日本貿易振興機構（JETRO）、国連諸機関、アジア経済研究所などによる資料及びデータ、論考、ウェブサイトによる情報などから考察を行う。また筆者は、2014年8月20日から2014年9月20日まで、シェムリアップ州を中心に聞き取り調査を実施している。2013年3月1日から12月10日までは、日系NGOのインターンシップでカンボジアに長期滞在をしていたこともあり、本論で調査にご協力頂いた団体は、そのインターンシップの際に繋がりや交流ができた方々を中心に聞き取り調査の依頼をした。実際に2014年夏に行った現地でのインタビュー調査はシェムリアップ州を中心に行ったが、それのみならず、他州の「地元住民の収入向上、売上向上、ブランド力向上、住民のエンパワメント向上」などの分野で活躍している企業やNGOを含む11団体の関係者、現地従業員、従業員の家族計50名ほどと、トゥクトゥクやバイクタクシー運転手、土産物販売の売り子、建設現場で働く方々を合わせた合計63名にインタビューを行った。なお、インタビュー対象が日本語もしくは英語話者の場合は通訳無しで行い、クメール語のみの話者の場合は通訳を介してインタビューを行った。

以下本論の構成を述べる。本章に次ぐ第2章では、カンボジア全土とシェムリアッ

ブ州における基本的な経済・産業事情、出稼ぎの事情や背景を述べ、どのような経済的理由や都市化の影響が農民を都市へと流動させるのかを明らかにする。

第3章では、「出稼ぎ」を巡る人々がどのような理由でそれぞれの暮らしを選択し、「出稼ぎ」が結果としてどのような経済的影響や心理的・社会的影響を及ぼしたのかを先行研究や実際の事例を通して明らかにする。その後、「結果として農村に留まる人々」にフォーカスを置き、筆者のフィールドワークの結果を踏まえ、彼らを農村に留める理由や背景を探る。農村に留まる理由は様々存在するが、その中でも特に農民の心理的・社会的側面と、経済的側面の2つの視点から分析する。

第4章では、第3章を踏まえて、カンボジア農民にとって彼らが自分の「居場所」だと思える物理的・心理的環境や、どのようにして自分の居場所を構築するのかを検討する。

最後に、カンボジア農民が経済的効果だけでなく心理的・社会的にも好環境な居場所を構築でき、かつシェムリアップ州で有効な農村ビジネスとは一体どのようなものかを示して結論としたい。

第2章「出稼ぎ」をとりまく社会

1. カンボジア概況

(1)カンボジアの概観と工業セクターの台頭

カンボジアは東南アジアの南に位置し、東にベトナム、西にタイ、北にラオスと国境を接し、南は南シナ海に面している。面積は 18.1 万 km²（日本の国土面積の約 2 分の 1 弱）の国土を有し、23 の州と 1 つの特別市で構成されている。カンボジア中央部には大河メコン川が流れ、同国の水運を担っている。国全体の人口は 1470 万人（2013 年時）で、首都プノンペン市内の人口は 150 万人であるが、このメコンデルタ⁽¹⁰⁾と支流のトンレサップ川、トンレサップ湖⁽¹¹⁾を取りまく中央平野部に人口の約 3 分の 1 が居住している。トンレサップ湖の北方にはクメール王朝の遺跡として有名な世界遺産アンコール・ワットやアンコール・トムといったアンコール遺跡群が存在し、世界有数の観光スポットとなっている（図 2）。



図2 カンボジアの概観

（出所 『世界地図 SEKAICHIZU』と『旅行のとも ZenTech』より筆者作成）

カンボジアは熱帯地域に属し、また、インドシナ半島にある他国と同様、モンスーンの影響を非常に強く受ける気候の特色を持っている。5月から10月が雨季、11月から4月が乾季と気候が大きく2つに分かれ、人々はこの気候変動に応じた生業活動を営んでいる。天水に頼る比重が高いカンボジアの農業においては、降水量は農業生産を左右する最大の要因である[高橋 2009:80]。国土の約30%を農地が占め、そのうちの約80~90%が水田であり、稲作農家が非常に多い。同国の農林水産業部門の生産額は、国内総生産（以下、GDP）額（2009年時）108億ドルのうち33億ドルで、農業人口は就業人口761万人のうち507万人と70%近くを占めている。同国において農林水産業は重要な産業である。

この農林水産業中心のカンボジア経済に転換期が訪れたのは、1990年代初めのことである。同国においては、1991年10月のパリ和平協定の締結により内戦が終結し、1993年5月に国連カンボジア暫定統治機構（United Nations Transitional Authority in Cambodia、以下 UNTAC）監視下の選挙を経て、政治面では安定期に入った。それと同時に、経済面では計画経済から市場経済への体制移行が進められ、1993年9月に施行されたカンボジア王国憲法において大幅な市場経済化を進めていくことが明記された。

まず、計画経済から市場経済への転換を開始した当時は、UNTAC などによりカンボジアに常駐した多数の外国人援助関係者の生活関連需要が創出された。その後、UNTAC が任務を完了して引き上げて以降も、同国には多数の外国人が引き続き居住し、国際援助機関や NGO などの支援による国際援助依存型経済が成立している。こうした状況は現在に至るまで続いており、これを契機として通貨のドル化も極度に進んできている。

カンボジアにおいて本格的な工業化がスタートしたのは、1994年8月に投資法が施行されてからである。同法には投資優遇措置が定められているが、外国資本の誘致を主たる目的として制定された色彩が強い。同法が施行されてからは、台湾・香港・ASEAN 諸国の華人系企業を中心に、同国の投資優遇措置、安価な土地、および安価な労働力などを活用する労働集約的な繊維縫製業への直接投資が増加している。特に、1997年に米国より最恵国待遇を得て、米国向けの製品輸出が有利になったことに伴い、繊維縫製業の工場進出は増加し、カンボジアのリーディング産業に成長している。カンボジア政府によると、2012年における同国の産業別 GDP 比率は上位4位までが、農業（33.6%）、縫製業（9.9%）、建設業（6.5%）、観光業（4.6%）となっており、依然

として農業の割合は高いが、徐々に縫製業が台頭し、その輸出割合も増加傾向にある。それ以前においても縫製業などの工業セクターの伸びは顕著に表れており、JICA の 2010 年貧困プロファイル調査によると、1994 年から 2004 年にかけて、カンボジアは高度経済成長を享受した。この成長の原動力は、工業セクター、特に衣料分野である。衣料分野の GDP への貢献は 2.0%から 45.6%と大きく拡大した。また、GDP シェアは 35%前後と変化は見られないものの、サービスセクターも、GDP への貢献度を 2.6%から 40.7%に増加させた。他方、農業セクターは、GDP シェアおよび成長率ともに低下させていることから、GDP への貢献度も 49.3%からマイナス 8.7%に激減した（表 1）。

表 1 主要セクターによる成長への貢献度（1994～2004 年）

セクター	GDP シェア (%)		年成長率 (%)		GDP への貢献度 (%) *	
	1994	2004	1994	2004	1994	2004
農業	45.9	30.9	9.9	-2.0	49.3	-8.7
工業	13.6	28.9	14.2	16.1	20.0	56.3
製造業	8.0	21.8	9.0	17.4	7.9	45.3
衣料	0.9	16.3	25.1	24.9	2.0	45.6
アグリビジネス	5.2	3.3	8.2	-3.4	4.7	-1.6
サービス	35.4	34.4	0.6	9.2	2.6	40.7
ホテル・レストラン	2.6	4.7	19.5	23.6	5.0	12.5
GDP	100.0	100.0	9.2	7.7	100.0	100.0

（出所 [World Bank 2006:57]より筆者作成）

（注）GDP への貢献度は、各年の GDP 成長率を 100%として、年成長率に前年の GDP シェアを乗じて算出している。

(2)カンボジア農業の課題

カンボジアの主要産業として縫製業などの工業セクターが台頭してきてはいるものの、今でも多くのカンボジア農村が稲作を中心とした生業を営んでいる。稲作は主に雨季作と乾季作の 2 つに分けられるが、同国では天水田で行う雨季作が圧倒的に多く、カンボジア農業省統計によると、2005/06 年度において作付面積の 87%、生産量の 79% が雨季作によって占められている。

筆者はインタビューの際に、農民から頻繁に「農業は儲からない」という話を聞いた。カンボジアが農業大国であり、国内で最大の雇用規模を誇るにも関わらず、農業で稼ぐことを困難にしている背景には一体どのような要因が考えられるのであろうか。

まず、カンボジア農業がどのような変遷を辿ってきて、近年どのような特徴や課題が考えられるのかを明らかにするためには、カンボジア農業というミクロな視点からフォーカスする前に、東南アジア全体における農業の傾向や概観について言及する必要がある。農業経済学の板垣は、東南アジアにおける食料・農業生産の国際分業化によって、先発国と後発国それぞれの利益と不利益が生じてきた背景を論じ、域内の経済格差が拡大傾向にあると指摘している[板垣 2006:16-21]。例えば、先発国であるタイが食品の製造・加工機能を保持し、国内外の需要動向に合わせた安定的なマーケット拡大・高付加価値食品を提供できるのに対して、後発国であるカンボジアは主に農産物加工品の素材供給基地としての位置づけと役割を果たすのみに留まっている。また、タイのアグリビジネスは、カンボジア産の原料農産物は品質面に問題が多く、品質と形状の不揃いな農産物が、不備な流通システムと輸送インフラのもとで激しく損耗しながら搬送されている事態も指摘している。このような状態に対して板垣は、カンボジア農業が先発国の求めるニーズを的確に充足できない可能性があるばかりでなく、タイのような先発国が後発国の農業者を支配下に置くという支配―従属関係が持続化する可能性も指摘している[板垣 2006:21]。農業の国際分業化は、先発国によるカンボジア農業への需要拡大を今後も促すと考えられるが、そのニーズや顧客満足に対して十分に応えていないというのが現状であり、後発国としての利益やメリットを十分に活かしきれていない。

次に、カンボジアの農業生産性が低い理由について言及する。矢倉は、次の3つを低農業生産性の理由として挙げている。1 つ目は、カンボジアの平野部の土が年代の古い土壌で養分が溶脱してしまっていること。2 つ目は、灌漑設備が十分でなく、水のコントロールがうまくできないこと。3 つ目は、灌漑水による養分供給がないだけでなく長年に渡って肥料をあまり投入してこなかったことによって生じた土質の劣化である[矢倉 2008:74]。そのため、灌漑によって作付される乾季作は、灌漑施設の整備や水の供給・排水システムが十分に進んでいないカンボジアでは浸透しにくいと考えられるため、雨季作のみの稲作が中心になってしまう。従って、雨季作に依存する農民は、乾季になると農村での仕事が激減する事態に陥ることになる。

また、農業開発経済学の荒木は、米生産の収益性が低い原因を、高騰する生産費（資材、労賃など）と販売価格の低迷などに起因するとした。生産資材に関しては、作付け前に借金をして購入し、収穫後借金を返済する農家が多く、返済を急ぐため、各農

家は収穫時に集荷業者の言い値で販売してしまうと述べている[荒木 2006:45]。また、取引の標準価格が存在せず、売渡し価格は取引毎に決められており、その価格情報は集荷業者の方が多くを把握している。従って農家のほうが取引上弱い立場になりがちである。さらに買い手は、不公正な秤での計量、端数の切り捨てなど、計量方法が不正確なことも指摘している[荒木 2006:46]。

このような生産と流通、取引間での問題に加え、荒木は、農業の様々な場面において農民の組織化が進んでいないことも低収益性の原因としている。カンボジア農林省は 2001 年に農協に関する勅令を發布し、その組織体制、組合員による出資金の提供、組合として独立した経営の実施を行うことを定めた。しかし、多くの組合が設立されてはいるが、形式的な組織に留まっており、農協本来の活動ができていない。また、農業の様々な場面で農民の組織化が進んでいないのは、ポル・ポト時代、強制的な集団組織の農業に従事させられた経験や、その後の社会の荒廃により同じコミュニティの中でも信頼関係を築くのが困難な風潮が、今日でも残っていることによるものだと主張している[荒木 2006:49]。

カンボジア経済研究所（Economic Institute of Cambodia、以下 EIC）によれば、農業技術の不足もカンボジア農業の大きな課題であると指摘している。カンボジア農業の技術普及が十分に行われていない指摘はこれまで数多くなされているが、それは技術普及員数を見れば明らかである。NGO などの非政府系の技術普及員を除けば、国全体として約 500 名の技術普及員しかおらず、農業家計全体が約 200 万世帯であることから、技術普及員 1 人あたり 4000 世帯の農家が割り当てられることになる。ベトナムの場合、技術普及員 1 人あたり 1340 世帯の農家が割り当てられる点と比べて、カンボジアの農業技術普及活動があまりにも小規模な実施に留まっていることが理解できる。

以上のような理由から、カンボジア農業は依然として就労人口の 70%を超える雇用機会を提供できているにも関わらず、農業セクター全体としてカンボジア経済への貢献力を低下させるという事態を引き起こしている。したがって、農村における雇用機会が農業セクターのみで、慢性的な低収入に悩む農民は、都市部の工業セクターなどのような、より高収入の職へ移動する傾向があると考えられる。

(3)カンボジアにおける人口移動と出稼ぎ事情

先述した農村から都市の工業セクターなどの高収入な職へ人々が出稼ぎをする傾向

や背景を踏まえ、ここでは、カンボジア国内における人口移動の傾向と、その背景を時代ごとに見ていく。

人文地理学のデルヴェール (Delvert) によると、カンボジア国内における人口移動、とりわけ農村から他地域、特に首都プノンペンを始めとする都市部への出稼ぎの傾向は少なくとも 1950 年代から見られた。彼によると、相対的に人口過密なプノンペン南方地域が出稼ぎ労働者の主な供給地帯であった[Delvert 1961]。彼は、プノンペンでの出稼ぎ職として、シクロ⁽⁵⁾運転手、荷役、水運搬⁽¹²⁾を挙げている。これらの仕事は主に農閑期に行われた。

その後、1975 年にポル・ポト政権が樹立され、4 年近くに渡り急進的共産主義政策がとられた。このポル・ポト時代には、強制移住により大規模な人口移動が起きた。都市住民が農村へ強制的に移住させられるだけでなく、農村住民の多くも他地域へ移住させられた。しかし、1979 年 1 月にポル・ポト政権が崩壊すると、移住させられていた人々の多くは自分の故郷へ帰還した。こうした傾向は 1980 年代を通じて見られた。

1980 年代は、ベトナムに支援されていたいわゆるヘンサムリン政権と、それに対抗するポル・ポト派勢力との間で内戦が繰り広げられた時代であった。この時代には、戦場となったタイ国境に近いカンボジア北西部諸州は、今日では治安と交通の改善で移住者が増えてきてはいるが、このような北西部への動きは当時少なかったものと見られる。

また、1980 年代には農村から都市への労働移住も小規模でしかなかったと考えられる。その 1 つの理由として、当時は都市部の産業も未発達であり、雇用機会に乏しかったことがあげられる。また、男性の場合、都市部へ行くと行政当局に捕まって内戦のために徴用される恐れがあったとも言われている[矢倉 2005]。

1992 年の和平成立と 1993 年の総選挙を経て、カンボジアに一定の平和が戻り、経済活動も活発化していく。このことを背景に、国内の人口移動、特に雇用機会を求める労働移動が性別を問わず活発化する。そのことを象徴するのが、先にも見たプノンペンを中心とする都市部と、その周辺での工業セクターによる雇用機会の拡大である。その後も、海外からの援助資金の流入、観光業の発展、そして縫製業の発展などに伴う都市経済の拡大と都市の人口増加は、都市における建設需要やその他のサービス需要を増加させ、建設・サービス業での雇用機会をさらに拡大し、農村からの移住者や

出稼ぎ労働者を都市に大いに惹きつけてきたと考えられる。このような出稼ぎ者は主に、工業セクターである縫製・繊維・製靴業、建設業、農業雇用労働、サービス業であるホテル・レストランなどでの給仕・店員、小規模売店での売り子、バイクタクシー、トゥクトゥク運転手などの様々な仕事に就いていた。この中でも縫製工場などの工場への就職率が昨今とても高くなっているが[矢倉 2005]、その理由としては次の2つが考えられる。1 つ目は、他の職種と違い雇用形態が正規雇用であることだ。見習い期間をクリアして正従業員になれば、工場が閉鎖されたり、生産縮小のために解雇されない限りは長期間安定して働くことができる。2 つ目の理由は、工場労働者は国の定めた法によって労働環境が保たれていることである。例えば、縫製工場の賃金は法令で最低賃金が決まっており、年々その最低賃金は上昇傾向にある。カンボジア政府は 2014 年 4 月時点では月 95 ドルだった最低賃金を、毎年 12~16% ずつ段階的に引き上げて 2018 年には 160 ドルにするという。他の職種の賃金率はまちまちであるが、非常に低いもの（1 日 1500 リエル⁽¹³⁾程度）から高いもの（1 日 1 万リエル）までを見ても、縫製工場の賃金はとても高収入であると考えられる。その他にも、有給休暇制度や、病気や出産のための休職制度も整っている。解雇されたとしても解雇一時金を受け取ることもできる。このような働きやすい労働環境であることもあり、工場への出稼ぎは家庭の中でも特に若年層女性が働きに行くことが多い。またその他にも、カンボジア農村の若年層女性が縫製工場に行く理由として考えられるのが、ミシンを使った職種が彼女らの憧れの職であることが多いという点である。実際に村の女性に話を聞くと、将来は縫製の技術を身に付けて自分で洋服やバッグなどのファッション関係の商品を作って店を開きたいという声も多い。農業以外では大規模に雇用されることのない若い女性の低学歴層に対して、工場セクターでの職場は数多くの雇用機会が提供されており、縫製工場の経験を通して将来の生業を構築する人もいると考えられる。

一方、出稼ぎ者の中でも未婚の若い息子や父親は、肉体労働の建設現場で働くことが多い。建設業の平均給料は月 100 ドル前後と縫製業までは高収入ではないが、他の出稼ぎの職種に比べると比較的高賃金と言える。また、建設業は工場労働と異なり臨時的な雇用形態が多く、1 つの現場で案件が終了すると、次の現場で新しい仕事を見つける必要がある。長期的に仕事を続けることが難しいため、農閑期に一時的に都市にやってくる人も多く、その間は業者によっては寝泊りをする場所を無償もしくは低

価格で労働者に貸している場合も多い。不安定な職ではあるが、多くの農民の最大の目的として考えられる「家計を助ける」ことは、農閑期の間だけでも比較的効率的に達成することができると考えられる。

以上のように、1 つ目は外資系企業による工業セクター、特に縫製業への直接投資の増加、2 つ目に農業セクターにおける低い生産性、それによる農閑期のみの効率的な現金収入の必要という理由によって、農村から都市への人口流動が大きくなっていると考えられる。

しかし、ここまで農村から都市へ移住する出稼ぎ者の傾向を見てきたが、出稼ぎ者の未来は必ずしも明るいものではない。外資に依存するカンボジアの経済市場は、グローバル市場の自由競争原理と、外交関係や政情不安の問題などによって大きく左右されると考えられる。例えば、カンボジアの縫製産業の成長は、「多国間繊維協定 (Multi-fiber Agreement: MFA) ⁽¹⁴⁾」に基づいて設定された欧米諸国への輸出枠に依存してきたと言っても過言ではない。2004 年でこの協定は撤廃されており、その後は基本的に自由競争原理によって貿易が行われ、労働生産性や品質、コストの面で最適な場所を求めて外資系企業は資本を投資することになるだろう。ましてや、最低賃金が年々上昇傾向にあり、インフラの未整備や政府の汚職などの問題も相次ぐカンボジアでは、この縫製産業が国際競争の中で生き残り続けるのは難しいと考えられる。

2013 年夏にカンボジアでは第 5 回総選挙が行われた。最大野党救国党の躍進によって、長期に渡ってデモ活動が続き、このような政情の混乱が外資による投資にもたらす影響は大きい。これはカンボジアに限った話ではないが、政情不安定な地域においては、外資系企業、国際援助機関や NGO などによる活動は一時的に閉鎖もしくは最悪の場合撤退を余儀なくされるケースも多々ある。

国外の出稼ぎに視点を移すと、カンボジア人の最大出稼ぎ国であるタイでの登録移民労働者の数は約 19 万人（2014 年 4 月時）で、未登録の不法移民労働者を含めるとこれをはるかに上回ると考えられるため、正確な規模は不明である。国際移住機関（以下、IOM）の調査報告によると、2014 年 5 月、タイ国内での大規模なクーデターを発端に、タイ軍政が外国人労働者を迫害するとの噂で、20 万人以上のカンボジア人出稼ぎ労働者がパニック状態に陥り、緊急避難や一斉に帰国したのは記憶に新しい。タイでは外国人が労働力として欠かせない存在となっており、低賃金で農業や漁業などを中心に従事している。タイ国内にはカンボジアやミャンマーなどの周辺諸国を中心に

200 万人以上の外国人労働者がいると言われているが、今回のような「事件」が頻繁に起こるようなことがあれば、出稼ぎに渡ったカンボジア人のみならず、労働力を大量に失ったタイ国内へのダメージも大きいであろう。

他にも、出稼ぎのリスクは様々存在するが、低収入かつ低学歴の農民が、カンボジア国内あるいは国外の都市部で、人身取引や人身売買の被害に遭うことも 1 つの大きな社会問題になっている。近年、国連や NGO、カンボジア警察の取り組みなどにより、その被害件数は減少傾向にあるものの⁽¹⁵⁾、農村の若い女性や子供が自分の意志で、あるいは家族や自分が意図しないところで被害に遭い、心身ともに深い傷を負ってしまうこともある。そのほとんどが、農村に安定した雇用先がないために、都市で就職の斡旋をするというブローカーの話に騙されたり、家族の借金と相殺するなどの手口で女性が都市へ連れ出されるケースである。

また、福井は、出稼ぎ者が存在する世帯において、特に世帯主が出稼ぎに行く場合、仕送りによって、家計内における医療支出や食費が増加する傾向があるにもかかわらず、子供の栄養水準に寄与するところが少ないことを指摘している[福井 2013:131]。確かに出稼ぎ者による送金は家計の生活改善に貢献してはいるが、出稼ぎ者が子供を残して出稼ぎに行く場合、残された子供の健康や教育に負の影響がおよぶ可能性が十分にあることを示唆している。

このように、出稼ぎという事象には、出稼ぎ者による送金によって家族の経済的負担を軽減し、国家経済を活性化させる一方で、多くの負の側面も見られるのである。市場原理の追求や政治的問題で結果的に生じる経済的デメリットや、過去に出稼ぎを経験していた人たちの話から抱く漠然とした不安感などから、農民は出稼ぎをすることを悩み、結果的には踏み留まる人も存在する。また、先述したような、家族と離れる寂しさや、収入増による貧困層から富裕層への妬みなど、心理的ストレスや他者との関係の悪化など、多くの負の効果を与える要因の 1 つとして「出稼ぎ」を捉えることができると言えよう。

(4) 農外ビジネス (OFB) の出現

ここまで、農村で出稼ぎを発生させる要因の 1 つとして、「稲作」中心の暮らしが考えられることを述べてきた。しかし、農民の中には、農村における生業活動を稲作のみに頼らず、収入向上のために、畜産や漁業、その他手工業や商業、サービス業を同

時に営む世帯も少なくない。畜産では、多くの世帯がウシ（農耕用）、ブタ（販売用）、ニワトリ（販売兼自家消費用）を飼育している。漁業では、河川や池、そしてカンボジアが誇るトンレサップ湖だけでなく、雨季には至るところの水田で村人が魚釣りをしている。しかし、畜産にはリスクが高く、漁業は資源制約を受けており、それらを通じた所得拡大も容易ではないため、農業以外の事業が重要になってくる。

この農業以外の事業を矢倉は、「農外ビジネス（Off-Farm Business、以下 OFB）」と定義している[矢倉 2008:207]。OFB は、農村の自宅を本拠地に行う手工業や商業、サービス業などの第 1 次産業以外の自営業を指す。特に土地なし零細農家にとって、OFB の振興による影響は大きい。

矢倉が調査対象としたカンボジアのある村では、近年 OFB を行う村人が増加傾向にあるという[矢倉 2008:207-209]。矢倉は、その積極的な原因として、近年の出稼ぎの増加などによる収入の増加や資本蓄積による余剰資金の増加を挙げている。その余剰資金を使って一部の農家は多額の資本を必要とする事業を営むことが可能になったという。また、村人の収入増加は、彼らの各種財やサービスへの需要を増加させ、その結果、村人向けの小売業・サービス業の供給拡大にも繋がったと考えられる。

しかし一方で、OFB の増加は消極的な理由によってももたらされていると考えられる。先に述べたような、低い農業生産性、家族の増加や土地売却による 1 人当たり農地面積の減少など、農業だけでは生計維持が困難な状況から、生活苦の世帯が収入を補うために OFB を始めるとも考えられる[矢倉 2008:224-225]。

OFB は世帯内で労働者を生み出し、自己資金の有効活用を促すことが可能である。職種によっては資産の少ない貧困層でも投資することが可能であり、利益還元率はその事業の規模や内容によっても大きな偏りが生じるが、多くの OFB が、1 年間の合計所得が稲作所得に比べても大きいことが検証されている[矢倉 2008:229]。

OFB の仕事は村のあちこちで垣間見ることができる。具体的には、食料雑貨小売業や軽食・菓子の製造販売、飲料水や農産物の売買、手工芸品の生産・販売、酒造り、織物業、陶器生産・販売、ヤシ砂糖作り、喫茶、米買い付け・肥料販売・脱穀業・精米などの稲作関連事業、各種レンタル業、自転車またはオートバイの修理業、オートバイやトラックによる輸送・運搬業などである。中には様々な職種が存在し、小規模で同じ村内の人を対象としたサービスを展開するものもあれば、村外の人向けのサービスを幅広く展開するものもある。筆者が訪れたある村でも、伝統的なロペアという

水草を使ったかご作りをする女性たちがたくさんおり、もともと世帯毎に行っている稲作とかご作りという副業から得る収入で生計を立てていた。

では、収入増加を期待する農民がこの「万能薬」ともなりうる OFB を行えば、わざわざ外部都市へ出稼ぎに行かなくてもよいのではないかという疑問を筆者は抱くが、そこには OFB を始めるに当たって様々な不安やリスクが存在し、結果として踏みとどまる農民も多いと考えられる。

OFB の開始を踏みとどまる理由として、まず考えられるのが、初期投資の資金調達が難しいという点である。農民の多くは、経験のない新規事業ゆえのリスクと借入に伴うリスクのため、そして高利率率といった厳しい借入の条件のために、借入による資金調達を敬遠している。そのため、OFB の初期投資資金は主に自己資金で賄われているのだが、もともと貧困状況にある世帯が収入増加を目的に OFB を始めようとする場合、失敗する可能性や廃業するリスクを負ってでも参入しようとする者は多くない。

次に、OFB による財やサービス提供は村内向けの事業が大半である。そのため、生産する財やサービスの需要には限界がある。もし競合他者による参入が激化した場合、新しい価値・サービスを展開し、他者と差別化を図れなければ生き残れない[矢倉 2008:255-257]確率が高い。しかし、現状では、新サービスのための商品・マーケット知識、情報の獲得・伝達、アイデアや技術力の不足や欠如という問題が見られ、OFB 拡大のためには農民自身による変革も必要であるが、第 3 者による様々な施策や介入の必要性もあると考える。

矢倉は、以上のようなリスク分散の方法として、次の 3 つを挙げている。1 つ目は、生産技術の改善と生産の安定化を図ることである。2 つ目は、事業計画段階で事業から得られる利益の見積もりができるよう、事業経営に関わる支援を行うことである。あらかじめ事業の成果を見積もっておくことで不確実性が軽減され、借入による投資も促進され、利益の得られないような事業に投資するという失敗も回避できる。3 つ目は、外部需要向けの事業開拓である。購買力の弱い地元農村向けの事業ではすぐに需要の限界にぶちあたって収益性が低下し、事業拡大もできない。ゆえに、他地域市場向けの事業の発展が急務であると考えられる。それに伴い、カンボジア政府は日本の大分県にならって「一村一品運動」を普及させようと考えているが[Council for Social Development, 2002]、そのような取組においては、各地域の特徴を生かしつつ外部市場に向けた製品の開拓を促す必要がある[矢倉 2008:257]。

この矢倉が指摘する 3 つ目の「外部需要向けの事業開拓」というリスク分散方法は、恐らく OFB を行う農民に限らず、筆者が調査対象としている企業・NGO の組織全般に共通している課題ではないかと考える。農村から外部者向け、特に都市部住民や、カンボジア人のみならず外国人顧客を相手に商材を扱うとなると、消費者のニーズをくみ取り、トレンドや機能性、デザイン性、商品コンセプトなどのブランディングをしていくなど、現状のカンボジア農民だけで経営を行うには困難な部分も生じてくると考えられる。今後の OFB、そして農村ビジネス市場を拡大させるためには、外部者、特に西洋近代的な価値観や技術・知識を兼ね備えた人物による介在が今後カンボジア人を育成していくためにも必要となってくる。言い換えれば、農村の OFB を取り巻く環境は、このような外部性・異質性という様々な「ヨソモノ的価値」[小國 2008:230] を取り込みながら変わっていくことが求められているのである。

2. シェムリアップ州の出稼ぎと都市化

(1) シェムリアップ州の概要

シェムリアップ州はカンボジア北西部に位置する(図 3)。州都のシェムリアップは、トンレサップ湖や世界遺産アンコール・ワット、アンコール・トムなどを含むアンコール遺跡群の観光拠点にもなっている。9～15 世紀にかけアンコール王朝の首都であったが、アユタヤ王朝（現タイ）による度重なる侵略により 15 世紀半ばに滅ぼされ、放棄されていた。日本で言うところの京都や奈良にあたり、年間 160 万人(2011 年時)もの外国人観光客が訪れる。近年、観光客の増加に伴い市街地では建設ラッシュが進み、5 つ星ホテルの大型ホテルから小規模なゲストハウス、西洋的なレストランやカフェ、旅行代理店、商業施設や観光用施設などが続々と建設されている。カンボジア政府は、今後も引き続き外国人観光客の増加を見込んでおり、更なる観光産業の活性化に力を入れている。また、シェムリアップ州を訪れる外国人の 99%が「余暇」を過ごすためにカンボジアを訪れている⁽¹⁶⁾ということもあり、カンボジア国内においてシェムリアップ州が担う観光業の発展は、国家経済を支える大きなアクターになっていると言える。また、カンボジア政府によると、シェムリアップ州はカンボジア国内の中で首都プノンペンに次ぐ 2 番目のハブ都市として、今後観光業による振興のみでなく、ビジネス面においても国内的・国際的双方の拠点として大きな注目を集めている。



図 3 シェムリアップ州の位置
(出所 『旅行のとも ZenTech』より筆者作成)

次に、シェムリアップ州の概要について述べる。シェムリアップ州は首都プノンペンから約 300km 北に場所に位置し、面積は 1.02 万 km^2 である。州の南側は東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖に隣接しており、湖付近で暮らす人々は、雨季と乾季による水量の変化に適応した生活を営んでいる。同州はカンボジア全体の国土面積の約 5.7%を占めており、全 24 の市・州の内 9 番目の大きさである。11 のスロクと 87 のクム、875 のプームを内包しており(図 1 参照)、大きな分類⁽¹⁷⁾としてはトンレサップ湖地域に属している。州の人口は 1998 年の 69 万人から 2011 年には 95 万人へと増加しており、カンボジア総人口の約 6.5%を占めている。約 80%が農村部に居住しているが、1998 年から 2008 年までの期間における農村部人口の年平均増加率は約 2%であったのに対し、同期間の都市部人口の平均増加率は約 5.3%であることから、都市化が進んでいると指摘できる。

シェムリアップ州では第 1 次産業従事者が大部分を占めている。しかし、1998 年と 2008 年を比較すると第 1 次産業のシェアは 82.4%から 73.0%へと減少する一方で、第 2 次産業及び第 3 次産業の数値が上昇している。特に観光業を中心とした第 3 次産業の値が 20.8%にまで達していることが特徴的である⁽¹⁸⁾。

また、シェムリアップ州の貧困者比率⁽¹⁹⁾は約 51.8%と半数以上が貧困に陥っている

(20)。この値はコンボンスプー（Kampong Speu）州（約 57.2%）、コンボントム（Kampong Thom）州（約 52.4%）に次いで 3 番目に高い数値である。貧困度の指標になる貧困ギャップ率及び二重貧困ギャップ率⁽²¹⁾に関しては、それぞれ約 17.3%、約 7.5%とカンボジア全 24 の市・州の中でも低い値となっており、これらの数値は、いかにシェムリアップ州の貧困が深刻な状況であるかを表している。この深刻な貧困問題を物語るかのように、同州では多くの NGO などの国際協力関連団体が活動し、国籍を問わず国境を越えて様々な団体がシェムリアップ州に進出してきている。市街地を歩けば、教育現場関係者、NGO 駐在員、政府関連プロジェクトの隊員、我が国から派遣されている青年海外協力隊員、そして世界中から集まるボランティアやインターンシップを目的に来る学生達など、シェムリアップ州を舞台とした国際協力関係の現場で働く人々は非常に多い。

市街地では、観光客の憩いの場という機能以外に、このような外国人労働者の長期的な衣食住のニーズを満たすようなサービス産業が盛んになっている。そして外国人労働者が増えることにより、彼らをターゲットとした外資による新たな商材・サービス展開がさらに始まり、結果的にお金を落としていくのは外国人のみという構図が出来上がる。このような市街地を中心とした急速な都市化は、カンボジア人、特に地元で雇用機会が少ない人々にとっては大きな就労のチャンスとなりうるが、実際に本当に現地の従業員とその家族の暮らしが長期的に潤うのか、そして、そこでの仕事が彼らにとって大きな成長と学びの場を提供し続けることができるのかということに関しては、疑問が残る。

(2)シェムリアップ州の人々の暮らしと出稼ぎ事情

カンボジアにおける農村研究（農村開発研究、農業研究、教育研究、保健・医療研究など）は様々行われているが、その中でもシェムリアップ州にフォーカスしたものは少ない。しかし、本論のテーマである「出稼ぎ」に直接関連せずとも、シェムリアップ州を概観する上で有益な先行研究がいくつか存在する。それらを参考にシェムリアップ州の人々の暮らしや出稼ぎの実態などを明らかにしていきたい。

まず、シェムリアップ州の市街地、とりわけ中心部は観光化によって様々な人々が行き来し、町のあちこちに欧米人が好むような商業施設や飲食店、ホテルやゲストハウスがあり、多くの観光客に利用されている。しかし、雨季のローシーズンと乾季の

ハイシーズンでは観光客数の増減が激しく、特にローシーズン中の土産物屋を見ると客がめっきりおらず、暇を持て余す売り子たちの姿が目立つこともある。土産物屋の商品を見てみると、スカーフ、ゾウやアンコール・ワットの模様があしらわれた木彫りの彫刻や小物類、ハンモック、「I love Cambodia」という刺繍が入った T シャツなどの衣服・小物、タバコなどの雑貨から、ドライフルーツや香辛料などの食料品に至るまで、異国情緒溢れる雰囲気味わうことのできる商品がたくさん陳列されている。土産物屋やその他サービス業に就く従業員は、シェムリアップ州内の農村出身者が多く、特に 10 代後半から 30 代にかけての未婚女性が多く働いている。彼らは、地元の高校を卒業して大学進学を希望して自分で学費を稼ぐために働いていたたり、大学に通いながらアルバイトをしていたり、あるいは、知人の伝手を借りて紹介制で農村から出稼ぎに来ているなど、働いている目的や、働き始めるきっかけは様々である。シェムリアップ州の観光業の実態については、ルウィン（Lwin）とモロー（Morrow）が詳しい。彼らは、シェムリアップ州という観光業が盛んな場所では、英語を十分に話すことができるかどうかで現地住民の雇用機会創出と収入向上のためには必要不可欠であると述べ、実際に高い英語力が必要とされる職種では給料や待遇がよいことを指摘している[Lwin and Morrow 2013:99,132-133]。彼らの調査結果としては、高度な英語力が必要とされる職種（例えば旅行代理店）では、全従業員が高校卒業もしくは大学進学者であった。英語力を維持するための勉強に費やす平均出費も、他業種（土産物屋、レストラン、ゲストハウス、ホテル）と比較すると旅行代理店などのほうが高くなっている。実際の給与に関しては、土産物屋の月給が 68 ドルなのに対して、旅行代理店の月給は 117 ドルと彼らの調査で報告されている[Lwin and Morrow 2013:119]。市街地で働くカンボジア人は、観光関連の仕事だけでなく、英語力が上がればさらに地位の高い仕事や、「よい仕事」に就く機会が増えると期待している。

市街地で働く人々は、市街地のアパートを借りて暮らしているケースもあれば、バイクや自転車を使って近隣の村から通っているケースもある。彼らの住居形態は職種と個人によって様々である。例えば筆者がインタビューを行った土産物屋の女性は、市街地から約 30km の距離にある村出身であった。彼女の働く店は朝 8 時に開店し、夜 10 時に閉店、休暇は正月休みとお盆休みの年 2 回しか取らせてもらえないと述べていた。バイクを購入するには給料が足りず、基本的に自転車で移動している。村までの夜道を 1 人で走ることは大変危険であるので、その土産物屋のオーナーの家族と

一緒のアパートに暮らしている。住居代や食事代は賄ってもらえるため月給は 50 ドルに抑えられ、ルウィン（Lwin）らの調査と比較してもかなり低い。

あるトゥクトゥクドライバーの男性は、実家がシェムリアップ州中心部から約 40km の距離にあり、市街地と実家を行き来できない。地元では両親が農業を営んでいる。兄弟は 9 人いるが、他の兄弟は彼と同じように、シェムリアップ州の市街地で観光客を相手にする仕事をしていたり、プノンペン近郊の縫製工場や、タイの建築現場に出稼ぎに行っていたりする。住居に関しては、市街地の友人や他のドライバー仲間と家賃をシェアしてアパートに住んでおり、雨季になって実家の農業が忙しくなると、帰省して両親を手伝っているという。彼は中学校を卒業後、まず市街地のレストランで働き始めた。しかし、8 時間労働で月給 50 ドルという待遇が数年続き、その後も給料が上がる見込みがなかったため、トゥクトゥクドライバーに転職した。その日の運と乗客数によるが、最高で月に 200 ドル近く稼げることもあるという。特に乾季は基本的に観光客が増加し、自ずと乗客も増えるので、前職よりもかなり稼いでいる。

土産物屋の女性も、トゥクトゥクドライバーの男性も、英語力はかなり高く、筆者とも普通に英語で会話することができた。インタビューも所々英語でやり取りする部分もあった。しかし、彼らはどちらも中学校を卒業後、実家を離れており、英語は独学で勉強するか、知人に教えてもらった程度である。彼らに、実家に戻って農業などの仕事をしないのかと聞くと、「実家には仕事がない」や「農業は大変な仕事だからやりたくない」と語っていた。また、「ここまで英語が話せるようになって、村に帰ったとしても、自分の他に英語を話す人も少ないし、この能力を生かせるような職場はない」とも述べていた。

関連社会科学の小口は、シェムリアップ州都近郊農村における大学進学の見逃しについて研究を行い、高学歴取得者の失業を深刻な課題として指摘している[小口 2012:43-60]。さらに小口は、カンボジアでは高等教育を修了した人々を吸収する雇用先が十分に整備されていないにも関わらず、中等教育修了後に農村での農業従事という職ではなく、借金をしてでも自分の世帯から大学進学者を輩出したいと考える傾向があることを問題視し、経済的には一見不合理なまでの「上昇志向」が増す仕組みについて論じている。

カンボジアの現在の教育制度は、初等教育 6 年間と前期中等教育 3 年間が義務教育であり、さらにその後、後期中等教育 3 年間が存在する。2007 年における初等教育（小

学校)、前期中等教育(中学校)、後期中等教育(高校)の統計上の純就学率は、それぞれ約 82%、約 29%、約 13%である⁽²²⁾。全体的に見ても後期中等教育以上の教育を受けた者の割合は少なく、彼らは国内で貴重な人物になりうる。しかし、高いレベルの教育を受けた人間の雇用状況は厳しいものであり、「大学を出ても仕事がない」という発言が至るところで聞かれると小口は指摘する[小口 2012:44]。また小口は、カンボジア農村における親族間の相互扶助的な支援についても論じている。カンボジア農村社会における親族間の関係性は、「“親族関係を安定的な基盤として”成り立っているものであるとは限らず、(ときにシビアに)形成された個々の関係性の上に成り立っている可能性がある。こうしたカンボジアの農村において非難の対象となると、村での生活の節々で必要となる他者との協力関係を結ぶことも困難になり、村内での日常生活の維持が脅かされると感じる可能性が高い」[小口 2012:54]と指摘しており、「非難の対象」にならないためには、それぞれ個人の「責務」を果たす必要があると考えられる。この「責務」が若年層、特に高等教育を修了した者にとっては「大学進学」であり、大学進学を修了した者にとっては「良い仕事」に就くことなのである。カンボジア農村では、少なくとも農村に留まり続けて農業を行うことは「良い仕事」と見なされない場合が多い。それは、多大な費用をかけて中等教育、あるいは大学での教育を受けた者にとって、農業はその教育費用に掛かった以上の利益創出を見込めるものとして見なされていないからである。また、これは後のインタビュー中でも実際にあった農村住民の声であるが、現在の親世代にとって農村に留まることは、ポル・ポト政権時代の「過酷な」農業を強制される意味合いを持つという。したがって、「農業＝辛い仕事」というイメージが払拭されない限りは、親世代は自分の子供にもそのような苛酷な経験をさせたくないという想いが働く可能性が強い。実際に市街地で働く若者の中でも大学進学を検討中もしくは在籍中の大学生に話を聞くと、押しなべて彼らは「大学まで出て農村に帰るという選択肢はない。だからと言って、大学を卒業してもどんな職に就けるかわからないし、仕事の量はとても限られていると思う。選択肢があまりない」などと述べていた。

ここまでをまとめると、シェムリアップ州の市街地では主に観光業が発達しており、外国人向けのサービスが様々に展開されている。ゆえに、観光業関連のサービス業の発展による雇用拡大や収入向上は大いに期待できる。しかし、収入向上のためには、語学力や業務上必要なスキルを磨く必要性や、より待遇が良い仕事にそもそもありつ

けるかどうかが重要である。また、高等教育を修了した「優秀な」人物が就く仕事として、シェムリアップ州の市街地を中心とする観光業にその雇用を吸収する環境は整っていない。しかし、高学歴者を子どもに持つ親は、農村での仕事にはできるだけ就かせたくないと考えるのが一般的であり、親族が若年層に「良い仕事」を期待する姿と、それを吸収しきれしていないカンボジア社会の現状との間に大きなズレが生じている。

他方、シェムリアップ州の農村部ではどのような暮らしや人々の営みが存在するのであろうか。カンボジア全土とほぼ同様に、シェムリアップ州でも約 80%の人口が農村部に居住している。彼らの主たる生業は農業であり、その中でも稲作が主産業として営まれている。市街地と比較して、村内での電気供給・水道・ガス供給が普及していないところも多く、多くの家庭が夜になると真っ暗で、特にすることもないと夜 8 時か 9 時には就寝し、朝の 4 時や 5 時に起床するという生活を送っている。電力供給のない場所では、車のバッテリーから電気を充電する人や、石油ランプを使用する人もいる。

水供給の手段は主に井戸であり、ポンプ式の井戸を利用できる世帯は限られている。井戸水を飲料水として使用する人も多いが、幼い頃からその水を飲んできたため体が慣れてしまい、下痢症状を起こす人は減多にいない。中には、飲料用の水を近くの市場もしくは近所の売店などで購入する人もいる。また、一般的な食事回数は 1 日 2 回（昼食及び夕食）であるが、もし売店や移動販売のおやつ売り商人がいれば、食事の他におやつとしてココナッツミルクを使った「おこわ」に似た食べ物（クロラン）や、孵化しかけたアヒルの卵を蒸して食べるポンティエコーンなど、様々な種類のおやつを 1000~4000 リエル（約 25~100 円）程度で食べることができる。

前に述べたカンボジア全体の農業課題と同じく、シェムリアップ州においても農業、特に稲作の低い農業生産性は顕著である。社会経済学の山川は、2012 年にシェムリアップ州バンテアイ・スレイ区にあるタットレイ村で調査を行っている。その村はシェムリアップ市街地まで約 11km の距離があり、村内には観光スポットもないため、アンコール遺跡群観光が目的である観光客も村を訪問することはない。したがって、観光地の恩恵を受けない村内での生業は、80%以上が稲作中心である。山川は、農業による月収平均値が他の職種と比較しても最も低くなっていると指摘している[山川 2014:70]。月収を職種別に高い順に並べると、兵士・警察、バイクやトゥクトゥクのド

ライバー、建設業、教員、ヤシ砂糖生産と続き、首位の職種は、農業の 5〜6 倍以上の月収を得ている。また山川は、高所得階層であればあるほど、米作収入の割合は小さくなる傾向が見られると述べ、野菜・果物の自家菜園・販売、家畜の世話、ヤシ砂糖の製糖、ヤシの葉の手工芸品生産といった、OFB といえるような職業による収入が大きくなると述べている[山川 2014:70]。

稲作と OFB の他には、建設業を農閑期のみ、もしくは年間を通して継続的に行う者が多い。市街地では建設ラッシュが続いており、重労働ではあるが、月 100 ドル前後を稼ぐことができることから、世帯の中でも特に男性成員がこの職に就くことが多い。筆者がシェムリアップ州市街地で出会った建設現場で働く人々は、同じ州内出身の大家族であった。その大家族は、母親と父親が子供 10 人と、結婚した子供の家族までも引き連れて総勢 20 人ほどで仕事をしている。朝 7 時〜夕方 5 時まで、途中で 2 時間の休憩を挟み、1 日 1 人 4.5 ドル前後で仕事をしているという。休日は日曜日のみで、単純計算すると 1 か月で確実に 100 ドル以上を稼ぐことができる。給料は経験値によって異なるので、経験豊富な母親と父親は最高で 150 ドルほど稼ぐ月もあるという。結婚している子供以外の家族が全員住んでいる自宅は市街地からバイクや自転車でおよそ 20〜40 分ほど走った距離に位置しており、彼らは毎日そこから家族全員で出勤している。彼らは自宅で農業を行っているが、子どもの数がとても多いため、安定した量の自家消費用の食料を作ることにもままならないという。ゆえに、年少の子供を学校に行かせるためにも、両親と年長の兄弟達が市街地の建設現場で働いていた。シェムリアップ州はタイに出国しやすい距離にあることもあり、以前はこの大家族全員揃ってタイに出稼ぎに行っていた。しかし、2014 年にタイ軍政による暴動が起きてからは、家族の安全を考慮して帰国した。しかし、筆者が彼らに「またタイに出稼ぎに行きたいと思うか」と尋ねたところ、「いつでも準備が整えばタイでもプノンペンでもどこへでも行く。お金が貯まればなんだっていい」と語っていた。

このように、シェムリアップ州は生業活動や人々の暮らしの面ではカンボジア全土の特徴と重なる点が多い。しかし、観光業を中心とした都市化が他地域に比べて進んでいることもあり、農村で稲作を中心とした生業を営む人々も、近年は市街地に繰り出し、出稼ぎを行うことが多い。一方、村に留まる人々は稲作のみに依存するのではなく、OFB を行うことで収入を向上させてもいる。この OFB は、都市化したシェムリアップ州市街地に出稼ぎに行かなくても、農村での十分な収入源になる可能性を秘め

ているのは事実ではあるが、そこに至るまでには、前述したような原材料費の高騰などの課題に対して、様々なリスク分散を行う必要がある。また、人々の農業に対する価値や期待値がとても低いことや、親世代が若い人々には農村に留まって仕事をして欲しくないと考えている点など、農村での暮らしと人々の出稼ぎを巡っては、短期的な国際協力援助や農村開発プロジェクトではそう簡単には解決できないような、人々の意識や内面に関わる根深い問題も潜在していると考えられる。

第3章「留まる人」文脈から捉える農村ビジネスの民族誌

1. インタビューの概要

これまで、農村の生業活動で十分な収入を得ることが困難な人々が、出稼ぎをしに都市へ渡るという構図を説明してきたが、彼らが地元である農村から離れる理由は本当に生活難のみが原因なのであろうか。一方で、農民の中には出稼ぎをせず農村に留まる人々も存在する。農村に留まり続ける人、過去に出稼ぎを経験していた人、今でも出稼ぎを行い、村と都市を頻繁に行き来する人、出稼ぎを希望するができない人など、様々な経済的・心理的理由から人々は出稼ぎをするかしないかの判断を下している。

本章では、筆者自身による現地でのインタビューで得られた内容を用いて、出稼ぎに行く人々と農村に留まる人々の特徴や背景について述べる。その後、農村に留まる人々が農村での暮らしに見出す価値や、彼らの「居場所」ともいえる農村地域での暮らしや実情、そしてその農村地域が秘める地域振興の可能性について検討する。

インタビュー対象者は、主に農村ビジネスと呼ばれうる活動を行っている組織や団体に携わる関係者、現地従業員、現地従業員の家族である。シェムリアップ州を中心に活動している団体を主な対象としているが、インタビュー対象の中には、農村ビジネスで活躍している他地域の団体も含んでいる。またその他にも、農村ビジネスに携わらずに出稼ぎを行うことを選択し、地元の農村から都市へ出てきて働く人々にもインタビューを行った。

インタビュー対象者には、仕事の現状、働いていて楽しいかどうか、給与などの待遇面で満足、不満足な点はあるかどうか、出身地や家族のこと、今の仕事をするようになったきっかけ、過去にしていたこと、今後やりたいこと、出稼ぎについてどう思うか、自分の故郷をどう思うか、カンボジア国内で都市化が進んでいること、農村での暮らし、農村での雇用機会の現状についてなど、様々な質問を行った。これらの質問を全て順序立てて尋ねたわけではなく、会話の中で回答者本人が積極的に話したがつているようなトピックがあれば、その話にフォーカスして会話を進めた。また、言葉に関しては、日本語で表現すると堅苦しく難しいようなものは、通訳の方になるべく柔らかく、回答者が理解しやすい現地語に柔軟に変換して頂いた。

筆者とインタビュー対象者はほぼ全員初対面であり、組織の代表者を通してインタビューの許可を頂いた。回答者は仕事の時間を削ってインタビューに回答して頂いていることもあり、1人につき40分～1時間とインタビューの時間はかなり短いものであった。また、回答者には今所属する組織の悪い点や話しにくいような点も本音で話して頂きたい旨を伝えたが、あくまでも団体を通してのインタビューであったので、彼らが「言いにくさ」を感じていた場合、どこまで本心で語ってくれたかは定かではない。しかし、通訳者を介して、できるだけ踏み込んだ話までして頂くよう繰り返しお願いをし、かなり本音で話ができたと、そうではない方との間に差が出た。

なお、個人情報保護の観点から、組織・団体名、そしてインタビュー者本人の名前は、組織・団体名・個人名の頭文字ではないアルファベット1文字で表記することにする（表2）。ただし、会話の途中ではインタビュー本人が仕事内容に関して触れることも多いため、それぞれの組織・団体がどのような活動をしているのかという概要に関しては軽く触れている。なお、異なる回答者ではあるが、回答内容に類似点が見られる際は、一部記述を省略することもある。

2. 「出稼ぎ」をめぐる人々の選択

ここでは、インタビュー対象者の回答を「出稼ぎをしているか、していないか」の基準で振り分けてある。それぞれ回答内容によって、彼らがどのような判断や基準で地元の農村から都市へ出稼ぎに来るのか、もしくは農村に留まるのか、という性質や特徴を明らかにする。

(1) 結果として出稼ぎをする人々

ここでは、出身地である農村から市街地へ働きに来ている人たちにフォーカスを当てる。彼らが都市で働き始めるようになった様々な背景や理由、心境なども踏まえて、「結果として」市街地で働くことを選択しているという枠組みで捉えたい。ただし、後述するように、市街地に留まり続け、生涯に渡って仕事をするという意識に関しては、回答者によってかなりばらつきがあることが明らかになった。インタビュー内容は以下のように質問毎に分けて記述する。

1)働き始めたきっかけ

【A-c】<A-c:23 歳女性。販売担当。>シェムリアップ州市内の大学に通うためにアルバイトとして働き始めた。

【A-e】<A-e:25 歳女性、販売担当。>親が農業を営んでいたが、生活が苦しかったので、A の職員に働いてみないかと声をかけられた。

【C-b】<C-b:25 歳女性。生産担当。>知人の紹介。働く前は学生だったが、勉強が嫌で学校を辞めた。

【C-d】<C-d:28 歳女性。生産担当。>実家は農業をしているが、過酷な仕事でお金にならない。私は将来農業をやりたいなくて、町へ働きに出てきた。

【C-f】<C-f:30 歳男性。工房マネージャー。>以前は市街地から遠く離れた村で、米や農作物を育てていた。しかし乾季になると仕事がないので知人に誘われて町に来た。

【C-h】<C-h:28 歳女性。レジ担当。※C-h の母親も一緒にインタビューを行った。>父親が幼い頃に亡くなって生活が苦しかったため、小学校卒業後自分が町で仕事をして家計を支えることを決めた。

【C-i】<C-i:26 歳女性。接客担当。>農村から出て、母の監視から逃れたいという気持ちがあった。

【D-c】<D-c:28 歳女性。工房リーダー。>家族がとても貧しく、家の仕事があるから学校にはあまり行けなかった。今の自分のように、いつも家族の中で誰かしらは出稼ぎに行っていた。

【E-d】<E-d:27 歳女性。工房マネージャー。>出身はコンボンチャム州⁽²³⁾で両親は農業をしている。市内の大学で勉強し、卒業後しばらくゲストハウスで働いていたときに E の代表に声をかけられた。

【F-a】<F-a:36 歳女性。生産担当。>家族と一緒に暮らし続けようと思わず、色んな経験をして、自分を試してみたかった。

【I-a】<I-a:30 歳女性。縫製担当。>姪の紹介。前は小さい店を家の前でやっていたが、売れないしお客もこないで辞めた。ミシンが好きだし憧れの仕事だったので働くことを決めた。

【N-d】<N-d:27 歳男性。トラック運転手。>実家はカンダール州で農業を営んでおり、農作物をたくさん作っていた。収入はかなりあったが、色んな人にお金を貸してくれとお願いされ、その結果みんな返金できず、結局自分たちの家族が土地を売ら

ざるを得なくなった。その後家族全員で出稼ぎにやって来た。

2)カンボジアが近代化・都市化すること、都市の暮らしについて

【A-c】近代化の流れは良いこと。裕福になるためには普通の流れだと思う。

【A-e】都市で成功している金持ちの人は、他人の幸福には興味がなく、自分の利益しか考えていない。

【C-b】外資系企業は嫌いだが、雇用が増えるので仕方のないこと。カンボジア人にはアイデアや経験、知識がないので外国人から学ぶ必要がある。

都会では自分が努力しない限り生きていけないが、努力してもチャンスが来る人と全く訪れない人もいる。

【C-c】＜C-c:家族（C-b の両親）＞上層階級が裕福になれば、下の人達も同様にゆくゆくは豊かになる。しかし、都市には近所との付き合いや助け合いが少ない。また、この国は汚職などの悪い慣習がたくさんあるので、カンボジア人が国を引っ張っていけるとは到底思わない。

【C-e】＜C-e:C-d の夫。トゥクトゥク運転手。＞

豊かさは町の人だけが感じられるもの。それを感じることはできない村の人は可哀想。

【C-g】＜C-g:C-f の家族（義母:アパートの経営、妻:テイラー）＞豊かな暮らしを求めて都市にやってきたが、知り合いが近所にいなく、仲が良い人が少ない。昔は法事にみんな呼ばれなくても来ていた。家を建てる時も近所の人が無償で助けてくれた。今は何をすることもお金がかかる。

【C-h（母親）】町の人のように、仕事を1番に考えてあくせくはしたくない。カンボジア人が好きな「のんびりする時間」がなくなったり、人間関係が悪くなるのは悲しい。

【D-c】絶対昔の生活のほうが良い。全てが「狭い」。人々の心が狭い。時間に追われてみんな忙しい。

カンボジア経済は外国の組織に頼るのではなく、自分たちで組織を立ち上げるべきだが、カンボジア人はお金と知識と技術、そして斬新なアイデアを持つ人がいないので難しい。

【E-b】＜E-b:31歳女性。工場の生産担当。＞町の生活のほうがいい。子どもの将来のため。農村では生活が苦しくて学校も満足に通えなかった。子どもには高学歴になっ

てほしい。

【G-b】＜G-b:35 歳女性。選別の工程担当。＞近代化は良い。町での暮らしに憧れることもあるが、私たちは貧しいので高いレストランなどには行けない。英語も読めないし、惨めな思いになるだけ。

3)将来やりたいこと

【A-c】前例がない画期的な土産物を生産し、観光客に販売するビジネスを始めたい。

【A-d】実家に帰り、家の近くでソフトドリンクを販売するビジネスを始めたい。市街地での土産物販売は、観光客用のみのビジネスなので、今後観光客が減ったら仕事がなくなる可能性もある。カンボジア人も欲しがるものを作りたい。

【A-e】田舎で農業をやりながら自分のお店（土産物屋）を開きたいが、誰向けにどのような商品を生産・販売してよいのかが分からない。

【C-e】40代になって貯金があればカフェを始めたい。市街地にある高い外国人用のカフェではなく、カンボジア人が通える安い価格で商品を提供したい。

【D-c】村に戻り、農家が作った米を自分で買い取って販売したい。今の仲介業者と違い、私は正規価格で買い取る。

【E-b】服を作り続けたい。子供には海外でデザイナーの仕事をさせて、子供がオーダーする服を自分で作りたい。

【F-a】私たちが作っているものは嗜好品で、海外からのオーダーがなくなれば自分の仕事がなくなるリスクも考えた。今は少しずつカジュアルな服の生産を自分の家の近くで始めていて、万が一の際はそっちに移ろうと考えている。

【F-b】＜F-b:38 歳女性。生産担当。＞この仕事は細かい作業が多いので視力が大事。年をとったらこの仕事を続けられないと思うので、実家のカンダール州⁽²⁴⁾で日用品を販売する店を開きたい。

4)農村の暮らしについて

【A-d】村に仕事がなく、みな出稼ぎに行く。若者はほとんどいない。でも、将来は村に戻りたい。お金よりも家族のほうの方が大事だと今になって思う。家族の愛を感じられるから。

【C-b】カンボジアの伝統的な文化や特産物などが残っている。

【C-c（母親）】農村でカンボジア人相手に商売をするのは大変。つけが多くて返金さ

れないこともある。また、昔の暮らしや、カンボジアの伝統的な暮らしは、ポル・ポト政権下の過酷な暮らしを意味する。その頃には戻りたくない。

【C-d】仲介業者が米を安く買い取るので、農業はお金にならない。田舎の環境では自分がしたいことができない。多国籍の人との交流ができない。

【C-e】米がきちんと正規の価格で買い取ってもらえる仕組みが欲しい。
カンボジア農村を変えてくれる可能性のある留学生などの優秀な人達が母国、とりわけ農村に戻らないのは問題。

田舎には町にはない絆が存在する。子どもを安心して預けられる環境がある。

【C-i】「農村の精神」がある。

【E-d】大学卒業後、田舎に戻るという選択肢はあり得ない。町でビジネスをやりたいと思うのが普通だが、具体的に何の仕事ができるのかは考えられない。

【N-d】村には仕事がないが、自然に囲まれてとても楽しかった。戻りたいが、土地も家もないのでもう戻ることはできない。

5)仕事を通して起きた良い変化、それぞれの組織の良いところ

【A-e】給料は安い、長く安心して働ける。英語や日本語など、勉強もできるようになった。

【C-b】給料で親を助けることができる。自分に自信が付いた。

【C-c】カンボジア人が自立するような仕組みを実践しているので、C はとても良い会社。

【C-d】技術を教えてくれ、「未来がある」仕事。C は利益だけでなく、本当に社会問題を解決することを追求している。どんな小さな仕事でもカンボジア人に挑戦させ、成長と自立を促している。自分が好きなものを好きな時に買えるようになった。

【C-e】C は福利厚生がしっかりしている。また、日系企業は知識と経験をカンボジア人に身につけさせ、人を伸ばす。

【C-h】学歴のない私にもできることがあると勇気をくれた。C は、今後 10 年のプロジェクト⁽²⁵⁾で、農村に農業を通して雇用を作ること考えていて素晴らしい。

【D-b】＜D-b:18 歳女性。生産担当。＞給料を両親に渡すようになって、家族との仲が良くなった。

【F-a】カンボジアは外国人の支援に依存しているが、F は最初から厳しく、カンボジ

ア人だけで自立できると鼓舞された。今は完全に現地化できていて自信と誇りがある。

6)自分が所属する組織に対しての不満

【A-c】日本人の団体なので、意思決定が面倒。

【A-e】良い活動をしているが、給料が安い。休みたいときに休めず、とてもきつい。

【C-b】日本流の経験や知識はカンボジア人には理解が難しいこともある。

【I-a】I は寄付で成り立っている部分が多い上に、売上も安定していないため、人件費をきちんと払えなかったり、オーダーが入るのにも関わらず、生地を買う資金がなく、十分な量を供給できない。また、他の土産物屋と同じような商品を作っているの、新しいものを作らないと、Iは他社に負けてしまう。

10)自分の職場が扱う商材について

【A-d】「フェアトレード商品」なので、欧米人などのフェアトレードの概念をよく理解している人ならあまり説明しなくても購入してくれる。しかし、中国・韓国系の人にはなかなか理解してもらえず、商品自体が本当に魅力的かどうかという厳しい視点で彼らは購入している。

【C-h】クッキーというのは斬新的な土産物。農村の農家にも貢献している。

【C-i】市場の商品は偽物が多く、接客もしつこい。Cのクッキーはディスカウントを要求されることもあるが、接客の質が良いので買う人が多い。また、食べ物だと土産物にしやすい。ご飯に対してディスカウントをしないのと同様、クッキーにも値下げを要求してくる人は少ない。

【D-c】商品の品質が良くないのに「貧しさ」だけで買ってもらうのはタブー。これはカンボジア全体に関わること。お金が欲しいあまりに、どこでどのように作られているかを顧客に全く伝えずに、高く売ろうとする人がいる。その商品は伝統を大切にしているか、品質は本当に良いものなのかという視点で売るべき。消費者もそのような視点で購入すべき。Dはそんなことができる。

【E-d】今は外国人が主な顧客だが、今後は多少高くてもカンボジア人の富裕層は品質が良ければ買う。しかし一方で「安ければなんでもいい」というのが大半のカンボジア人の価値観。海外の文化や流行を掴んでいて、かつ安い商品であればそっちに流れるのは仕方ない。

【G-b】Gの商品は環境や健康に良いし、品質に自信がある。しかし、これは完全に外国人向け。貧しいカンボジア人には高くても買えない。

【G-c】<G-c:25歳女性と母親。包装担当。>Gの商品はセンスがあるが、カンボジア人の作るものにはセンスがない。材料となる農産物を作ることはできても、加工するアイデアと技術がない。クリエイティブな考えをできる人がいない。

ここまで、「結果として出稼ぎをする人」の語りを取り上げてきた。彼らが出稼ぎに至った理由を分類すると、次の4つに分けられる。1つ目は、経済的貧困が理由で地元の農村から1人だけもしくは家族と共に都市へ出てくるというケース。2つ目が、子供が親の目から離れたい・もしくは自立したいというケース。3つ目が、都市での仕事を通して技術を身に付け、自分の力を試したいというケース。そして4つ目が、特に高学歴志向の学生において、都市でどのような職に就けるかも不明だが、とりあえず農村で働くという選択肢はあり得ないと考え、都市での就職を希望するケースであった。しかし、興味深いのは、4つ目以外の理由で出稼ぎをしている人々に「今後どこで何をしたいか」と尋ねると、多くの人々が「いつかは村に帰って自分の（何かしらの）店を持ちたい」という回答が多かったことである。経済的貧困が理由で土地や家などの財産を全て失っている人の場合は、「もう村に戻ってやり直すことは難しい」との意見もあったが、それでも、都市で永遠に暮らし続けることはあまり考えないというのが彼らの主張であった。一概に彼らの生き方やライフスタイルにおける性質を特徴づけることは難しいが、出稼ぎを最初から期間限定で行うと決めている人々もいれば、一方で、もう頼る当てもなく、今後も都市で生きていくと決断したような人々でも「故郷に戻りたい」という思いを抱き、都市での生活を老後まで続けるというプランを立てる人は少ないことが分かった。また、将来店を持ちたいという意見が多かった点については、店の種類は、食品や日用品を扱う雑貨店が最も多く、その他に自分で作った商品（衣類関係）、土産物店などが挙げられた。しかしI-aが述べているように、農村で店を営んでいても「お客も少なく、商品も思ったより売れないので辞めた」という過酷な現実もある。どんな商材を誰に売するのか、その際どのようなリスクが考えられるのか、ということを予想ないし吟味できないまま出店してしまうことは、逆に廃業を迫られたり、出店前よりも収入が安定しないなどのリスクが生じる恐れがある。

また、彼らには「カンボジア人は基本的に技術も知識も経験もないので、欧米諸国よりも劣っている」という劣等感が蔓延していることが分かる。特に、「Made in Japan」に対して絶対的な価値を見出し、カンボジア産の商材やサービスなどに対する評価がとても低い傾向がある。これは、「謙遜」や「自慢をしたがらない」、「恥ずかしがり屋が多い」というカンボジア人の国民性も原因の1つかもしれない。

D-c は、カンボジア人の売買行動に対する意識変化を促す発言をしていた。販売者は扱う商材のルーツや品質を保証すべきであり、また、購入した物が消費者自身へ良い効果・変化をもたらすのか、倫理的に正しい消費であるのか。言い換えれば、エシカル⁽²⁶⁾なモノの売り方・買い方をすべきだという認識を持っている。もしカンボジア人の売買行動に対する意識が変われば、外国産のいわゆる「良い」とされる商材ばかりを選ぶのではなく、「Made in Cambodia」で彼らが誇りに思えるような商材やサービスを自ら積極的に選択するようになる。このような流れは、農村ビジネスを展開する上で地域ブランドを拡大させる要素として重要である。

(2) 出稼ぎをしない人々

1)働き始めたきっかけ

【A-a】<A-a:24歳女性。生産担当。>Aが村に活動概要を説明しにやってきて、団体に共感した。家が仕事場に近いので、家族とも一緒に居られると思った。以前は都市へ出稼ぎをしていたので、家族と会うことができず寂しかった。

【B-b】<B-b:24歳女性。販売担当。>前は家の近くでガソリンスタンドの会計を担当していたが、大変な仕事で給料も良くないので辞めた。その後Bの募集を見つけて応募した。

【H-a】<H-a:18歳女性。生産担当。>織物の先生が、織物ができる人を探しに来て、Hが運営する織物センターで働くことを決めた。家族も全員同じ織物の仕事をしている。兄弟の学費を稼ぐのと、母親が病気になって家族を支えられなくなったため、自分が家族を支えることを決めた。

【H-b】<H-b:41歳男性。村内での織物技術指導を担当。>11年間村で織物技術の指導を行っている。若い頃からずっと織物の文化や作り方を知っている。両親も兄弟全員も織物産業に携わっている。自分の村で、伝統的産業を残す仕事に携わりたいと思い、この織物の職人になることを決めた。

【K-a】<K-a:男性。村長兼自宅でホームステイの受け入れを行っている。>ホームステイの受け入れを始めて6年目。もともとはKとは違う団体（NGO）に、遺跡観光が目的の観光客を、家に有料で泊めるサービスをしてみないかと提案された。

【K-c、K-d】<K-c、K-d:かご作りの女性2名。>もともとは家事や農作業以外の空いた時間でゴミ箱程度の生活に必要なものを作る程度だった。今はお皿、帽子、鍋敷きなど商品のラインナップも増えた。もともと今のような大きな産業ではなかったが、UNESCOなどの第3者の支援があって本格的になった。初期の頃はその関係者が関わるが多かったが、今は教えてもらった技術を上手く応用して自分たちだけで作成している。とても大きな収入源になっているわけではないが、ないよりはあったほうがいい。この村では15世帯しかこのかご作りができない。

【K-e】<K-e:33歳男性。ローカルガイド兼教員。今後ホームステイの受け入れも行う予定。>学校は高校2年生で辞めて、その後は家の仕事や農業の手伝いをしていた。近所に有名な遺跡があるので、米作りだけでは家計を支えるのも大変だと考え、安定した給料を求めて、かつ自分自身の英語勉強のため、ガイドをやってみようと思った。過去に2年間タイとの国境でセメントを運ぶ仕事をしていたが、とても苛酷な仕事だったので、その後は再び村で農業や漁業などを行うことを決めた。

【K-f】<K-f:49歳男性。考古学専門で文化遺跡修復関係の代表。>大学で考古学を学んでいて、文化や歴史を勉強するのが好き。地元の歴史を残すという仕事をしていることにやりがいを感じている。

【K-g】<K-g:32歳男性。遺跡修復のチームリーダー。>中学校卒業後、ずっと実家の農業を手伝っていた。その後、この遺跡の仕事と出会った。故郷の文化を守りつつ、地元で安定した給料がもらえるというのはとても良いこと。

【K-h】<K-h:29歳男性。ローカルガイド。>高校卒業後、あるNGOの支援で英語を勉強した。お金がないから都市への大学進学は諦めたが、地元でも英語を身につければ、いつかホテルや外資系NGOなど、何かしら良い仕事に就けると思った。両親は農業をしており、農業は大変なので大人になってからもやりたくないと思っていたし、両親も別の仕事を希望していた。今はこのローカルガイドをやることで地元の魅力を伝えることに喜びを感じている。

2)仕事を通して起きた良い変化、それぞれの組織・活動の良いところ

【A-a】Aが自分の給料をいくらか災害や病気などの緊急時の保険として貯金しておいてくれること。自分で全給料を貰ってしまうと貯金せずにすぐ使ってしまうので、何かあった時のために団体がお金を管理してくれるのは有り難い。

【B-b】給料も良いし、ボーナスもある。休みのシステムもしっかりしているから働きやすい。商品もカンボジアの伝統的なもの、本当に品質が良いものなので、誇りに思う。職場から家はすぐ近くなので、家族と一緒に居られるのも有り難い。観光客を相手にしているのでリスクもあると思うが、会社が潰れるとは思わないし、観光客が今後長期間いなくなるということも考えられない。Bは海外でイベントや展覧会なども行っていて、「カンボジアの伝統工芸品といたらB」というのが海外にまで伝わっている。観光客だけでなく、カンボジア人の富裕層にもBは支持されている。今後カンボジア人がもっと豊かになれば、Bのマーケットも国内向けに拡大していくと思う。

【B-c】<B-c:25歳女性。生産担当。>新しい家を建てたり、バイクや携帯電話などを購入したりと、豊かな生活になった。1番の喜びは、自分でカンボジアの伝統工芸品を作れるという自信がついたこと。

【H-a】私が作るものは、村の人がみんな昔から作ってきたもの。だから、将来もこの仕事が自分の仕事だとずっと思っていた。自分が作ったものが人前で飾られているのを見るのは嬉しい。また、地元に関わる産業に携わることとはとても嬉しい。海外の人にも人気があるので、この文化がもっと広まればいい。

【H-b】自分の教え子が作品を完成させたとき1番嬉しい。

【K-a】この取り組みのおかげでお金も入るようになったし、互いに文化の違いを知ることができる。

【K-b】<K-b:村長の妻。>外国人が宿泊しに来ると言葉が通じないのがもどかしいが、毎回新しい発見があってとても楽しい。村に来る外国人はみんな温かい。

3)自分が所属する組織に対しての不満や不安、課題など

【A-a】仕事は楽しいが、休みが少ないので時々辛い。仕事が大変な分、給料はもっと欲しい。

【H-a】村の人々はセンターやHがなくても作品を家で作れるが、作ったものをどう販売するかということは自分たちだけではできない。

【K-a】N氏（Kの代表）はカンボジア人をハッピーにできる人で、この村には欠かせない人。たとえN氏がなくなったとしても、自分たちでできることはたくさんある。近隣の人同士で助け合ったり、かご作りのような技術を持った人もいる。若い人が通う学校もある。私たちがもともと持っている力やアイデアを徐々に形にすることはできると思うが、観光客や外国人を相手にすると、やはり言葉の問題や、彼らが何を考えているのか分からなかったりもする。そういう点ではN氏を必要とする部分は多い。

4)将来やりたいこと

【A-a】貯金があつたら今と同じ場所に新しく家を建てたい。牛も欲しい。

【A-b】将来は貯金して、家の近くに生活雑貨を売る店を持ちたい。町で仕事をするのではなく、農村でカンボジアの伝統的な仕事に就きたい。

【B-b】家族や友人、自分の大切な人と一緒に居られればそれで十分。

【B-c】自分の家の近くに生活雑貨を売る店を持つこと。子どもの面倒も見つつ勉強もしながら物が売れるのは最高の環境。家で自分にしか作れない物を作って、それを販売して生活したい。

【H-b】織物技術を活かして新しいデザインを作りたい。自分にしか作れない商品、独自性がある商品を世の中に発信していきたい。

【K-b】カシューナツの加工と販売を盛んにしたい。近所で学生が集まって、カシューナツで何か作れないか試行錯誤している。私も一緒に何か村から特別なものを作りたい。

【K-e】村から出ていく人は、自分の村の文化や伝統、社会がどうなるかということをちゃんと考えていない。私は地元の若い世代を育成することを大切にしている。私が率先してこの村を盛り上げることで、若い世代が大人になってもこの村で生きていく方法を学べるようにしている。学校では英語教室だけでなく、この村には様々な資源があるので、工夫次第で何でも作れること、どうやって村で仕事をするのか、どうやって生きていくのかという教育もしている。

この村には助け合いという文化、米を育てる仕事、農薬を使わなくても美味しいものを作ることができるという技術もプライドもある。自分がここでホームステイの受け入れを行い、かつ、農薬を使わないオーガニック食材を提供する料理クラスのような

ものを開いたら、自分自身の健康について考え、地産地消の考えを持つ人が増える。学校の脇に無農薬の畑を作って、カンボジア人の若者と観光客向けの料理教室を開きたい。また、この地域でしかできない「体験型ツアー」を作りたい。外国人観光客にも、都市からやってきたカンボジア人にも、農村で暮らすということはどういうことかを教えたい。いつも口にする食べ物がどのように作られているか、どのように調理をするのか、魚やココナッツの採り方、米の作り方などを実際に村に来たお客様に体験してもらおう。この近くの遺跡や寺をただ観光するだけでなく、農村の良さをアピールするものを作りたい。外国人のみならず、都市から来たカンボジア人にもこのようなツアーが人気になると考える理由としては、都会の暮らしに疲れた人は田舎の癒しを求めてやってくると思うから。「田舎も悪くない、田舎も素敵だ」ということを農村から出て行こうとするカンボジア人にも見せてあげたい。

【K-f】今私は地元の人々に、遺跡を大切にすることや、環境に負荷をかけない生活をすることの重要性を呼び掛けている。遺跡の保全と持続可能な村の伝統的な暮らし双方の重要性を訴えつつ、より多くの人にこの地域は遺跡のみならず自然が豊かであることを伝えたい。いつかやってみたいことは、自然と遺跡にダメージを与えないようにしつつ、自分の土地を買って、そこでホームステイの受け入れを行うこと。外国人のみならず若いカンボジア人も魅力を感じる場所を作りたい。

【K-g】貯金が貯まったらトラクターを買いたい。それを村の人に安く貸し出して、もっと効率よく村全体の農業が回る仕組みを作りたい。例え自分が金持ちになっても、村に留まり続ける。村で農業関係のビジネスを始めて貧しい村人を助けたい。農村の農業や仕事に対して期待する人が少ないので、手を挙げて一緒に農村を盛り上げてくれる人を作りたい。

【K-h】ガイドとして、外国人には遺跡だけでなく、村の人の笑顔が素敵であることや、カンボジアの田舎の暮らしが魅力的であることを伝えたい。カンボジア人には、もっとこの村の仕事を増やして、農村でも生きていけるということを伝えたい。そのためには、自分の能力を活かして英語やフランス語の語学教室を増やし、地元のガイドを育てるなどの取り組みが必要だと思う。

5)農村での暮らしについて

【A-a】今は家族の暮らしを1人で支えている。夫はいるが、農業を雨季のみ手伝い、

あとは家にいてゴロゴロしている。怠けているようにも見えるが、雨季に男手がないと大変。基本的に農村の男は村から出ないで肝心なときさえ居てくれればそれでよい。

【K-a】ホームステイは100%カンボジアらしい暮らしではないのかもしれない。しかし、お客様がいてもいなくても、いつか自分たちも豊かな暮らしになり、西洋的な暮らしが普通になる日も近いと思うので、外国人用に特別な準備をしているという感覚はない。私はこのような暮らしを自分が率先して村の人々に見せ続けることで、もっと村全体の人たちにも「憧れの意識」を持って欲しいと思っている。必死に働いて努力をすれば、農村でも自分みたいな暮らしを実現できると思ってほしい。

【K-b】この村には人々との交流や会話がある。

【K-c、K-d】この仕事を農村で続けるのは、村の外に出て行く体力がもうないから。町に行くと家族に会えないし、家族の面倒を見る人もいない。私は村の生活のほうがいい。知り合いが多く、人間関係も良いと思うから。

【K-h】自分は地元に残って良かったと思っている。大学を出た優秀な人たちは地元には戻ってこない。大学出身者のための仕事がこの村にはない。彼らはお金のことしか考えておらず、村や故郷の将来を考えていない。自分はそうではない。今の給料は十分ではないが、町での仕事をしたいと思ったことはない。自分には学歴がないし、町へ行っても今のように自分を必要としてくれる人がいないと思う。今は若い娘の将来のために、この地元で私は頑張っている。娘がこの村でも、自分がやりたいことに挑戦できるような環境になって欲しい。例え将来村から出て行っても、その後村に戻ってきて良い仕事に就ける環境を作ってあげたい。

6)カンボジアが近代化・都市化すること、都市の暮らしについて

【A-a】町で生活するのも憧れるが、遠い世界の話。街の人は怖い。私は田舎者だからきつと騙されてしまう。今もこれからも家族のそばにいたい。母親は年をとっているの、私が町で暮らしたら自分以外に面倒を見る人がいなくなってしまう。

【A-b】＜A-b:18歳女性。生産担当。＞町には絶対行きたくない。全部が怖い。農村の人は悪い人に騙されて連れていかれると思う。タイやベトナムで売春の仕事をやらされる可能性もある。

【B-c】町の暮らしは好きじゃない。カンボジア人らしくないから。英語もできないので外国人と触れ合うことも嫌。

【H-a】私は町で生活するのは怖いので、田舎で生活を続けたい。この仕事も作品が出来上がるまでは休みが全然ないので忙しい。将来結婚したとしても、私はここで仕事を続けたい。この技術を後世にも伝えたい。

【K-b】今の暮らしにとっても満足しているので、町に行く必要性を感じていない。町に行ってもどんな仕事をして生きていけばいいのか分からないし、何かとお金がかかる。町の人々は、それぞれにやることがあって忙しいので、みんな心を開いてくれないと思う。

【K-c、K-d】もう私たちは年を取っているし、この村から出ることは絶対にない。

7)出稼ぎすることについて

【H-b】出稼ぎに行く人は、今すぐ使えるお金が欲しいというケースの人が多い。建設業や縫製工場での仕事は確かに給料をすぐもらえるが、そのような仕事は長期的に自分への技術や学び、誇りを獲得できる仕事だと思えない。農村でも技術やアイディアさえあれば、家で家族と仕事ができる。しかし、みんなこのような面倒な仕事は辞めて比較的楽に毎月安定して稼げる場所に行こうとする。そして、縫製工場でも給料が安いと今度は外国へ出稼ぎに行く。

【K-a】生活が苦しくて農村から出て行く人や、農業は大変だから農村で暮らしたくないという人には、自分が率先して農作物をうまく育てる方法、土を良くする方法などを教えてあげたい。それでも今は町が近代化して、若い人たちが町への憧れを抱いて村に戻って来ないことも多い。若者が町に惹かれるのは仕方のないこと。1 番問題なのは、町での忙しい暮らしを続け、自分が年をとり、仕事で疲れた時に、故郷に戻る場所がないこと。「今から戻りたい」と思っても、村で働いた経験がない人には農村で生計を立てていくことは難しい。だから、1 人でも多くの若者に「将来戻ってくる場所」を作っておくことが大事。村に留まって生きる人たちが、自分の人生経験や暮らし方を教えることができれば、そこに憧れを抱く人は村に残る可能性もある。

【K-b】若い人たちは私たちが田舎を心地よいと思っていても、町に行きたがるもの。この村では土地さえあればあとは努力と工夫次第で十分に生きていける。出稼ぎに行くのは、農業以外に仕事がないから。農業は自然を相手にするのでとても大変な仕事。若い人はこの辛さには耐えられないのかもしれない。

【K-c、K-d】若者が村から出たがるのは仕方ない。農業も大変な作業だし、このかご

作りもお金になるまでが時間がかかってとても大変。努力や我慢ができる人じゃないとこのものづくりは続かない。今までたくさんの人に、出稼ぎの代わりにこのかご作りを勧めたが、興味がない人のほうが圧倒的に多い。

【K-g】自分もいつか町のほうへ出てみたいと思ったが、お金がないのでそれは難しい。

ここまで、「結果として農村に留まる人々」の語り取り上げてきた。多くの大人や親世代の村人は、若者が町へ出稼ぎに行くことを仕方のないことだと指摘している。その原因として、農業を中心とした農村での暮らしが決して楽ではないことを挙げている。また、農村に留まる人々の中で OFB に従事し、ものづくりを行っている K-c と K-d などが述べていたように、商品を作り最終的に収入を得るまでには、途方もない作業量と、それに耐えうる忍耐力と我慢強さが必要である。農業に関しても同等の意見が多く、経験がない若い人ほど重労働かつ低収入の農業から遠ざかる傾向がある。

K-g は、農村から出て行く若者、特に進学のために都市へ渡る人々が多い点に関して「大学に行っても意味がない」と述べていた。彼のみならず、筆者が通訳のカンボジア人男性と話しているときも、彼は次のように嘆いていた。

「シェムリアップ州市街地には仕事がない。大学卒業後もモトドップやトゥクトゥクの運転手をやる人も多い。コネとお金がないと良い仕事にはありつけない。今カンボジアでは様々な援助によって農村に学校が建設されている。しかし、村人がその学校を卒業後、結局仕事も収入も満足にないという状況では、いくら学びの場があっても意味がない。何のための教育なのだろうとも思う」。

次世代を担う若い人々のために教育が必要であることは、カンボジア農村の話に限らず、都市部の人々、そしてカンボジア国内のみならず、全世界においても重要事項であることは明白である。しかしカンボジアの人々は、「学校での学びを職に繋げる」という感覚がより強いように感じる。高学歴であればあるほど、より良い職業に就くことができるという一種の固定観念に縛られているような気もするが、この選択が必ずしも正しいかどうかは、皮肉にも、雇用機会をどれだけその地域で創出できているか、そして、その人がどれほど人脈や「チャンス」に恵まれていたかどうかという点で決まってしまうのかもしれない。その「チャンス」の到来に関しては、本人の努力

ではどうにもならないような裏の世界—賄賂やコネなど—の事情で変化が起きやすく、期待を抱いて都市に出て行く若者にとって、そこは逆にそれまでの努力や苦労が裏切られる場所ではない可能性もある。

上述した農村に留まる人々の背景は、農村機能の消極的な一面から捉えたものである。一方、積極的な一面から農村に留まる決断を下す人も存在する。例えば、H-a はまだ 10 代という若さで、町や海外文化に対する憧れがあるかと思いきや、カンボジアの昔ながらの暮らしを好み、そして自分自身が伝統産業の職人として活躍することに喜びと生きがいを見出している。彼らが従事する OFB は、現時点では農村住民の大きな収入源に繋がっているとは言い難い。しかし、彼らは様々な OFB を通して、村内での交流の場、良好な人間関係を構築しており、内面の充実を実感していると言える。また、出稼ぎをし、行く先不透明なリスクを背負うよりかは、小規模ではあるが確実に雇用を生み出す OFB に携わるほうが、内面の充実感も相まって、人々の良好な生活環境を構築できるとも考えられる。

K に関わる農村住民が、シェムリアップ市街地のようなマスツーリズムに代表される観光業の発展ではなく、もともと存在する農村での生き方や暮らしぶりをありのままに見せる新しいツーリズムによって、外国人観光客のみならず都市のカンボジア人富裕層の需要を見込むアイディアは、とてもユニークかつ斬新的である。事実、近年の旅行者の傾向として、実際に地元住民と共に、その土地でしか経験できない「体験型」ツアーを堪能する旅行形態が流行してきている⁽²⁷⁾。このような潮流から考えても、彼らが考える新しいツーリズムには、農村の地域活性化のみならず、地元住民に「地元農村が注目される」という自信と誇りを取り戻す効果が期待できる。

このように、農村に留まる人々の暮らしの実践は、出稼ぎ者、農村を離れようとする人々、そして農村の明るい未来を期待しない人々に対して、農村でも経済的・内面的に充実した暮らしができるという自信を与えうる。また、農村に留まる人々は、現在の暮らしに、生きがいや喜び、心地よさを感じており、たとえ満足な収入に繋がらない仕事をしている場合でも、やりがいや自信、そして誇りを生み出している。結果として農村での様々な営みは、彼らにとって「居場所」と呼べるような空間を構築していると言える。

(3) 「出稼ぎ」による正負の効果（経済的側面と心理的・社会的側面から）

ここまで、都市で出稼ぎをする人々と、農村に留まって生計を立てる人々の様子を、彼らの実際の声をもとに概観してきた。人々は「出稼ぎ」を考える上で、経済的側面のみならず、心理的側面や、自分と社会との関わり（社会的側面）に、何かしらの正負の効果を見出しているからこそ、それぞれの人が、それぞれの場所で生きていくことを選択しているのである。

ここで改めて、「出稼ぎ」には実際にどのような効果があるのかを考え、特に、農村に留まる人々が、農村に留まることにどのような効果を期待しているのか、そして何が彼らを農村に留まらせるのかを明らかにしたい。農村に留まる人々に焦点を当てる理由としては、彼らが農村に見出す価値や展望、そして課題を明らかにすることが、今後のカンボジア農村の地域振興ならびに地域活性化を検討していく上でとても有効だと考えるためである。出稼ぎをしなくても農村で生きていける、もしくは生きていこうとする人々の背景を探ることは、今後新たに農村から都市への流失者を増やさないためにも重要であると考ええる。

まずは、都市へ出稼ぎをする人々について検討する。出稼ぎの背景として経済的貧困という理由が考えられる。農村での貧困が理由で雇用機会が多いと思われる都市に人々が流失する。貧困の理由として第1に考えられるのが、農業を中心とした生業活動のみでは十分な収入を得ることが難しいこと。第2に、家族の不慮の病や事故などによって、高額の出費が緊急で必要になる場合である。このような緊急性が高い場合は、より早く給与が支払われる日雇いの仕事をしたり、他者から借金をするなど、安定した給与の確保や返済の義務などの点でリスクが高い選択をすると考えられる。たとえ農業から OFB と呼ばれるような仕事に転換したとしても、需要がない、競合他者が多いなどの理由から廃業を迫られる人もいる。結果として、土地や家などの財産を手放すことになり、故郷に戻る場所がなくなる人々や、家庭から単独もしくは複数で出稼ぎ要員として都市へ渡る人々が発生する。

その次に出稼ぎを促す要因として考えられるのは、都市が「新しいこと」や「レベルの高い仕事」に挑戦できる場、自己成長が期待できる場であるという人々の思いである。これらは漠然とした都市に対する憧れから生じるものとも言えるが、中には農業を中心とした暮らしを毛嫌いして「農村に留まりたくない」という感情を抱く人もいる。このような感情を抱くのは、若者特有の反抗心や、両親の監視から逃れたいと

いう気持ち、または、農村には我が子の学歴に見合う仕事が存在しないと親世代が考えているという背景が原因として考えられる。

次に、出稼ぎをすることによる正負の効果を考えてみたい。まず正の効果として第1に考えられるのが、賃金の発生である。農業を中心とした生業活動は天候や自然災害などの影響を受けやすい。また、収穫後には予期せぬ低価格で仲介業者に買い取られてしまうことも多々ある。出稼ぎをすることによって、雇い主もしくは国が定める最低賃金をもらえる可能性が高まり、経験値が上がれば収入や職場内でのポジション向上という道も開ける。収入が確実に向上し、かつ家計への送金や貢献の意思がある場合、出稼ぎ労働者による家族への送金は、農村に暮らす、もしくは共に都市へ渡った家族にとって大きな支えになる。収入が増えると、今まで欲しかったものを購入したり、家を建て替えたり、貯蓄を増やしたりと、国連ミレニアム開発目標(以下、MDGs)で提唱する「最低限の暮らし」を上回るような、いわゆる「豊かな」生活を達成することが可能になる。

他にも正の効果は様々存在するが、特にインタビューを通して明らかになったものは、都市での就業が出稼ぎ労働者にとって大きな「学びの場」になるということである。特に外国人と接する機会が多い、観光客向けの商材やサービスを扱う職場では、英語を中心とした語学力の獲得、欧米的な思考や価値感に基づく接客の獲得や向上など、文化の理解に苦しむ場面も多いようではあるが、それ以上にやりがいや楽しさを見出しているケースが多いように感じた。また、外資系企業もしくはNGOで働く人々は、外国人による経営下で働くことが多く、カンボジア人にはないような技術や知識を身に着けることができる。カンボジア人が国家経済をリードしていくことにあまり期待していない人々が多い点は問題視すべきことではあるが、カンボジア人自身で外国人マーケットを扱うビジネスを今後行う際には、欧米的な価値観やセンスが必要不可欠になってくる。そうなると、町や市街地への出稼ぎは、新たな学びや気づきを促進させる手段として有効的とも言えるのかもしれない。

今度は出稼ぎをすることによる負の効果を考えてみたい。本論の冒頭でも、インフォーマル・セクターや日雇い労働に従事することは、収入や雇用場所が不安定であることが多い点や、仲介人に騙されて最悪人身売買の被害に遭うケースがあることなど、出稼ぎの負の効果については軽く触れていたが、インタビューを通してより明らかになった負の効果について述べたい。

まず、出稼ぎ者本人ないし家族が、以前に比べて「お金に固執するようになった」と感じる事が多くなった点が考えられる。この感覚は、出稼ぎによって生じたもの、もしくは、資本主義経済をベースとした近代化という背景により、カンボジア人全てに共通するものである可能性がある。「お金を稼ぐことに夢中になり、以前のような他人を思いやる気持ちや相互扶助の精神が見られなくなった」と感じている人は多い。また、家族の一部を都市へ送り出す側の人々にとっては、出稼ぎ者と頻繁に会えないこと、きちんと送金がされないことなどが重なると、「出稼ぎのせいで人が変わってしまった」と感じるケースも少なからず存在することがわかった。

社会経済学の小林は、2000～2004年にコンポントム州の人々の生業活動について調査を行っているが、その際に、縫製工場へ出稼ぎに行く娘を持つ、農村で暮らす母親をインタビューしている。その母親は、「縫製工場は残酷だ」という評価をしている。これは、娘が幼い子供を母親に預けて自らは出稼ぎに行き、出稼ぎに行く娘の事情を全く知らない孫をあやしながら語った母親の言葉である[小林 2004:317]。このことは、出稼ぎ者を送り出す側の家族にとって、家族の誰かが出稼ぎ要員となることは、残りの家族の面倒を見る負担がかかり、本来営まれていたであろう平穏な暮らしや家族関係に齟齬をきたすことでもあるという事実を示している。

次に負の効果として考えられるのが、農村に生きる人々、特に若い世代が少なくなっていることである。実際のシェムリアップ州農村部における出稼ぎの人口流動数値を把握することは難しいので、これは彼らの感覚ベースの話である。しかし、実際に話を聞いてみても、農村に留まりながら農村の貧困や生活改善を試みる人々は少なく、農村から若者がいなくなることをただ危惧する声だけが聞かれた。若者、特に男手のいない家庭は、残された家族だけで農業を続けるのは難しい。ゆえに、比較的実家に帰省しやすい出稼ぎ者は、雨季で農業が忙しくなると可能な限り手伝いに帰るという事例もあった。

次に、出稼ぎをせず村に留まる人たちに焦点を当てたい。彼らが農村に留まるのは、出稼ぎをする必要がない、もしくは出稼ぎをしたくないという選択肢のどちらか、あるいは両方を選ぶためである。前者は、農村での暮らしや生業活動が安定しているという良好な経済的要因が考えられる。農業で十分な収入を得ることができている人、農業以外に何かしらの賃金労働に従事し給料を得ることができている人、OFBに携わり儲けを生み出している人であると考えられる。後者は、出稼ぎの負の効果を予想し

ているか、実際に過去に出稼ぎの経験があり、その上で、都市よりも農村の暮らしに価値を置くようになったという2択が考えられる。この農村の暮らしや価値というものは一体どのようなものなのであろうか。

まず1つ目は、農村には都市よりも相互扶助の精神文化が深く根付いているということだ。彼らは、「都市の暮らしは仕事が忙しく、他人へ気配りをする余裕がない」という。また、農村に居るときよりも都市へ出たほうが人々は何事にも貪欲になるということも指摘している。収入が増え、欲が満たされれば、また新たな欲が生まれる。個人の生活のみを良い方向へ維持していくことに焦点が置かれ、本来農村にあったであろう人々の間で交わされる何気ない会話、垣根を越えた気配りや思いやり、何かあればすぐに駆けつけて助け合うことができる環境、そのようなものが都市では相対的に少ないという。農村地理学のホガード(Hoggart)とブラー(Buller)は、農村コミュニティの精神が本質的に貧困の相互依存に基づいているため、多くの場合裕福になると崩壊してしまうことを指摘している[ホガード・ブラー1998:15]。カンボジアの場合も、出稼ぎ者による残された家族への送金は、家族の収入向上と貧困からの脱却を促す。その結果、残された家族は隣人に依存しなくても生活できるようになり、貧困時代に存在したはずの農村コミュニティ内の社会的統合が著しく弱められることもありうる。

農村の暮らしや価値を特徴づける2点目は、農村は都市に比べて物価が低いことだ。農村でも病気や事故など緊急の際は莫大な出費を迫られることはあるが、都市で生活続けるよりは出費を抑えることができる。都市に出て、食事や住居などを一から全て自分1人でやりくりするのは難しい。ゆえに、出稼ぎ者は知人や雇い主、親戚などの伝手を借りて生活を営むことが多い。

3つ目に、農村住民は、都市の暮らしと農村のそれを比較し、都市の西欧的価値観や文化が浸透している状況を「カンボジアらしくない」と否定している。グローバル化により、農村社会にも西欧文化や資本主義経済の影響は大なり小なりあるが、農村での暮らしのほうの方がより伝統的で昔ながらの生活を営む人が多いという。そして、彼らはそこに「カンボジア人らしさ」や「自分たちらしさ」を見出しており、農村での営みを「ストレスがなく心地よいもの」として捉えている。

4つ目に、農村に留まる人々、特に親世代は、どんなに若者や自分の子供が都市へ出て行ったとしても、彼らを「いずれ地元に戻る人」として認識している。彼らは、都市での生活や出稼ぎをあくまでも一時的なものとして捉えている。「若者が都市へ

行ってしまうのは仕方のないこと」、「いつ若者が帰ってきてもいいように、安定した生活ができる環境を整えておく必要がある」という意見が多かったのも、若者を流動的な存在として捉えていたことが背景にあると理解できる。

これら以外にも様々な理由で人々は農村に留まる決断を下しているが、彼らには「農村の暮らしはやはり良い」という感情が共通項としてあるのではないだろうか。そのことは、前述した K-e や K-h などの発言から伺える。農村の価値を認めるとき、人々は無意識に都市の暮らしとそれを比較して、農村の価値を絶対視する傾向が見られる。そして、最終的には「自分が留まるべき場所」として、農村社会が彼らの「居場所」として機能しているのだ。

(4)再帰的近代化と農村の価値

農村の暮らしは一般的に近代性を帯びた都市と相反するものとして捉えられる。近代的な発展を遂げつつある都市は、ミクロな視点では、個人の暮らしや雇用を確保する場として、マクロな視点では、国家経済そして国際政治・ビジネス拠点としての機能が考えられる。しかし、都市の西欧的で単一的な発展は、持続的に人々の幸福を実現させ続けられるかという点では不安が残る。都市を中心とした近代化は、結果として富裕層と貧困層間の格差を拡大させ、ヒエラルキーの上層に属する人間のみが潤う経済構造を構築してきた。しかし、昨今カンボジア国内においても、このような都市部集中型の近代化を見つめ直し、その反省を生かす必要性を感じる人々が存在してきたと筆者は考える。

まず、都市へ出稼ぎに行き、収入の向上や富の獲得が彼らの幸福に繋がるかということは、必ずしもそうではないことをカンボジア人自身は感じている。出稼ぎの結果、豊かな生活を達成している出稼ぎ者本人であっても、いつかは農村に帰還したい旨を主張していた。経済学の堂目は、人間の富と地位への野心や欲求を掻き立てるものを、他人からの同感や称賛であるとし、他人の目があるからこそ、この欲求を保とうとすると述べている[堂目 2009:72-73]。一方で、貧困や低い地位の不便さは、他人から同感されず無視され、私たち人間を苦しめることになる[堂目 2009:81]。カンボジア人が都市へ行き、いつかは農村に帰還したいと思う理由も、この論理に当てはまる部分があると考えられる。人々は富と地位を獲得する過程にある場合、もしくは、自分の周りに自分以上の富と地位を形成する者が出現していない限り、自分のそれまでの努力や

功労は承認され、幸福度が高まる。しかし、自分以外の者に称賛や同感が集中すると、裕福な他者と自分との比較を行い、自分を貧しい惨めな存在として苦しめることになる。また、富と地位を獲得するために払った様々な代償があまりにも大きい場合、逆に苦悩や失望が自分を苦しめることもある。出稼ぎを行い、このような経験を持つ人々、あるいは他者から苦い経験談を聞き、都市で働くことに希望と期待を抱けない人々は、結果として農村に留まるという決断を下していると考えられる。

また、農村の価値を語る人々は、農村での暮らしに近代化の再帰性を見出しているのではないかと考える。再帰性は、反省性、自省性、反照性、リフレキシビティなどと翻訳され[中西 2009:7]、方向性を見失い、暴走し続ける西欧近代社会に対応する新たな枠組みとして、現代の世界を捉えることを可能とする。

ギデنز(Giddens)は、西欧的な合理性や単純な近代化は、社会を一直線に富の増大や質の向上へと向かわせるものであるとし、特権的な地位を認めていない。彼は、世界の文化の多様性を考えれば、近代の制度には様々な文化的対応が可能なことを強調しており、近代化そのものがもたらす限界、矛盾、困難と折り合いをつけ、多様な文化との再帰を見出そうとしている[Giddens1994:80]。

また、ロバートソン(Robertson)は、単一的な西欧近代化、都市化、グローバル化が進む中で、世界化するとともに地方化する「グローカリゼーション」の必要性を唱え、グローバルに考え、ローカルに行動することを提唱している[Robertson 1992:8]。彼は、再帰的近代化の中でグローバルとローカルの循環を促し、グローバリゼーションの一方化への抵抗を試みようとしている。グローバル化が進む中で見逃されてきたもの、重要視されなかったもの、理解されなかった各々の文化やローカルなものが、たとえその場で理解されなくても、異なるわからないものとして重んじられることで、多様な価値や文化を受容し、そこから触発を受けることが可能になるであろう[中西 2009:32]。西洋にならえと単一的な成長を続ける国家政策や発展の仕方に対して疑問視する流れや、農村回帰や里山資本主義⁽²⁸⁾と呼べるような潮流、一農村や地方の暮らしをもう一度見つめなおし、そこに光を当てること―は、カンボジア農村においても見られると考える。外資に依存する同国の近代化や資本主義経済は、都市の一部の人間にしか富と財を残さない。近代化に再帰性を見出し、農村のローカルな人々の暮らしとそこに潜在する資源と人材、彼らの文化や独自性が持つ力を最大限に活用させることができれば、農村は潜在する魅力や価値を、より強固たるものにすることが可能

となろう。今や世界レベルでのグローバル化のみならず、ローカルレベルでの人材育成、資金獲得、商品開発、地域資源のブランド化、地域創造などに関するパッション、ミッション、ビジョン、アクションなどが求められているとも言える[田中 2008:i]。農村に留まる選択をした人々自身が、農村の価値や魅力、そして農村で十分な収入を得て生業を営むことができる姿を、外部他者や都市へ流失した、もしくは流失する可能性がある若者へ発信することは、外資系企業や NGO、国際協力系組織などの第 3 者による介入・支援で地域振興が行われるより、はるかに大きな信頼と自信を創出することが可能になると考える。

3. シェムリアップ州における農村ビジネス

グローバル化による西洋近代化、そして資本経済主義の蔓延はシェムリアップ州市街地において顕著である。観光業に特化した都市中心の単一的な経済発展は、ローカルなレベルでの発展を促しているとは言い難い。同州の農村地域に恩恵をもたらすような経済やビジネスの仕組みとは一体どのようなものが考えられるのであろうか。また、ローカルに光を当てる農村ビジネスは、農村住民の心理的側面にも正の効果を生み出し、彼らにとって「居場所」となる環境を創出させることが可能なのであろうか。

(1) シェムリアップ州における農村ビジネスの位置づけ

シェムリアップ州観光当局によると、同州はカンボジアを代表する観光地として、今後もアンコール遺跡群を中心とした観光客の増加が見込まれる。しかし、観光業は世界経済の減速に伴う観光客数の激減などの外的要因に影響を受けやすいため、今後も今日までの大幅な観光客の増加を期待し続けることは難しい。それゆえ、外国人観光客のみによる経済効果を期待し続けることも難しいと考えられるため、今後はカンボジア人の富裕層並びに中間層の所得増加や、彼らの嗜好が国内マーケットへ転換することも期待しつつ、彼ら向けの商材やサービスを展開していく必要があると考える。

それでは、シェムリアップ州を観光目的で訪れる外国人観光客のみならず他のマーケットも視野に入れた農村ビジネスとは一体どのようなものが可能なのであろうか。現在シェムリアップ州で行われている農村ビジネスと呼べる商材・サービスのターゲットは、主に現地を訪れる観光客、諸外国在住者、現地在住外国人である。プノ

ンペンなどの都市から訪れるカンボジア人富裕層や中間所得者をターゲットとするところは少ない。これは、農村ビジネスの市場が、外国人観光客が好むような土産物や嗜好品がメインであることの他に、現地住民の日常生活に必要なものを取り扱っていないこと、そして価格が高いことが考えられる。しかし、外国人顧客のみならず、現地マーケットも視野に入れることは、国内での供給と需要を長期的に生み出し、地産地消の好循環を作っていくことに繋がる。カンボジア産のものを農村から発信していくことは、カンボジア人が「カンボジア人でも良い製品が作れる」という自信と誇りを取り戻すきっかけになるのではないだろうか。さらに、「Made in Cambodia」の商材ないしサービスをカンボジア人自身がブランディングするようになり、国内外双方で需要を生むことができれば、外部者に頼らずとも農村内で人員の確保と雇用の拡大ができ、結果的に農村の持続可能な暮らしと活性化に繋がると考える。

(2) グリーン・ツーリズム

農村ビジネスのツールの1つとして有効と考えられるのが、グリーン・ツーリズムである。グリーン・ツーリズムは、農村の美しい景観、豊かな自然生態、伝統的文化といった農業・農村の多面的機能を資源としており、農村住民のライフスタイル（価値観、生き方、生活様式）により形づくられている。農業・農村の多面的機能は地域的広がりの中で発揮され、それが持続していくためには、農村住民の集団としての価値観や生き方が重要である[宮崎 2006:27]。シェムリアップ州へ訪れる外国人観光客や都市住民に、現在の主要な観光地のみ訪れてもらうのではなく、農村で繰り広げられる農村の人々の生き方、魅力などを実際に五感で感じてもらうことにより、都市と農村の交流を図ること、そして、訪問客のライフスタイルや内面に影響を与えることが可能となる。また、都市に在住している、もしくは、農村を離れて生活をしているカンボジア人にとっても、農村は「いつか戻りたい場所、心癒される場所」であるという話も実際に聞いた。彼らをターゲットに入れた農村でのツーリズムを展開することは、人々の農村への帰還意思や農村の価値をより高め、なおかつ都市住民と農村住民が共に学び合い、感動し、共鳴するきっかけになると考える。

シェムリアップ州には観光拠点としてアンコール遺跡群が存在するが、それ以外にも観光拠点と呼べるものは様々存在している。地雷博物館やアンコール国立博物館などの過去の歴史や文化に触れる場所、トンレサップ湖や西バライ⁽²⁹⁾などの自然と触れ

る場所、織物や陶器などの伝統工芸品に触れられる場所や、シェムリアップ市街地での飲食・ショッピングなど様々である。これらの観光地はいわゆるマスツーリズムと呼ばれるような旅行形態の拠点になっていることがほとんどであり、団体客が大型バスに乗って、事前に決められた旅程に沿って周遊するというものだ。このような旅行形態は比較的、韓国、中国、タイなどのアジア系外国人が参加することが多い。もちろん欧米諸国の団体観光客も存在するが、欧米人は単独でアクティブに行動する旅を好む人が多い。彼らをターゲットとした近年話題になっている新しい旅行形態が、マウンテンバイクや自転車に乗り、ガイドと少人数で農村部や大自然を駆け巡るアクティブなツアーである。その他よくある旅行形態として、日系の大手旅行会社も手掛けているボランティアツアーがある。これは、貧しい農村とされる地域の学校や孤児院に観光客が出向き、現地の子供たちと交流をしたり、簡単な語学や体育の授業などを行ったりするというものである。ただ有名な観光スポットを巡る旅で終わるのではなく、現地の人との交流を図り、その地域が抱える課題や貧困問題—先進国が考える「貧しい」農村の暮らし—などを体感し、旅行者自身に学びを提供するというものだ。

ここまで様々な現存するツーリズムを概観してきたが、今後検討すべき点は、今までシェムリアップ州で繰り広げられてきたマスツーリズムに替わる新たな農村を舞台としたグリーン・ツーリズムを展開し、外国人観光客のみならず、カンボジア人にとっても魅力的なものを作れるかどうかという点である。そして、グリーン・ツーリズムも取り入れた OFB によって、現地の人々が経済的にも心理的にも潤うことが重要である。そのためには、カンボジア人が農村地域社会にどのようなメリットや価値などを見出しているか、そして、どのような環境が彼らにとって生きがいや喜びを生み出す「居場所」となりうるのかということを検討する必要がある。

グリーン・ツーリズムの成功例とされるのが、タイ国政府が 2000 年から推進している「アグロツーリズム」である。これは、タイ農村の内発的発展を目的にして、地元農村の人材、資金、技術を基本に行政の支援を加えて、農産加工業や観光サービス業の新しい事業を展開することである[宮崎 2006:179]。このタイ農村では、現在のカンボジア農村と同じく、農業の課題や農民の出稼ぎなど様々な課題を抱えていたが、この事業の推進により地元農村が注目され、多くの農民の収入向上と地域活性化が順調に進んでいる。同様の事業推進を、シェムリアップ州農村ならではの独自性と特徴を生かして地域に浸透させることは、地域振興を促し、雇用機会の提供にも繋がり、農

民の都市への流失を防ぐことができる考える。

今世紀に入ってから、前述したタイのようにアジアの国々においてグリーン・ツーリズムが広がり始めているが、1990年代に先行して我が国においても本格的にグリーン・ツーリズムが普及してきている。ヨーロッパとは異なる我が国のグリーン・ツーリズムは「地域経営型グリーン・ツーリズム」や「都市農村交流」とも呼ばれ、宮崎はその特徴を、農村の内発的発展のための地域経営や、農林漁業・農山漁村体験を重視して、受入れ農村側が組織的に対応するなどの特徴を持つと述べている[宮崎 2011:1]。また、地域経営型グリーン・ツーリズムによる農村開発は、「農のあるライフスタイル」を訪問者に促すことによって、訪問者は農業・農村体験の程度に応じて、ビジター型、リピーター型、サポーター型、農村移住希望者型に区分できると指摘している[宮崎 2006:26] (図 4)。このように、人々のライフスタイルの転換や、思考の転換によって、都市住民と農村住民の相互理解や相互交流が促進され、農村での生活従事者の増加も期待できる。そして、このような潮流が現在東南アジアでも広がりつつあることを宮崎はしてきており[宮崎 2011:2]、カンボジア農村においても、グリーン・ツーリズムによる人々のライフスタイルや思考の転換を促すことができるのではないかと考える。

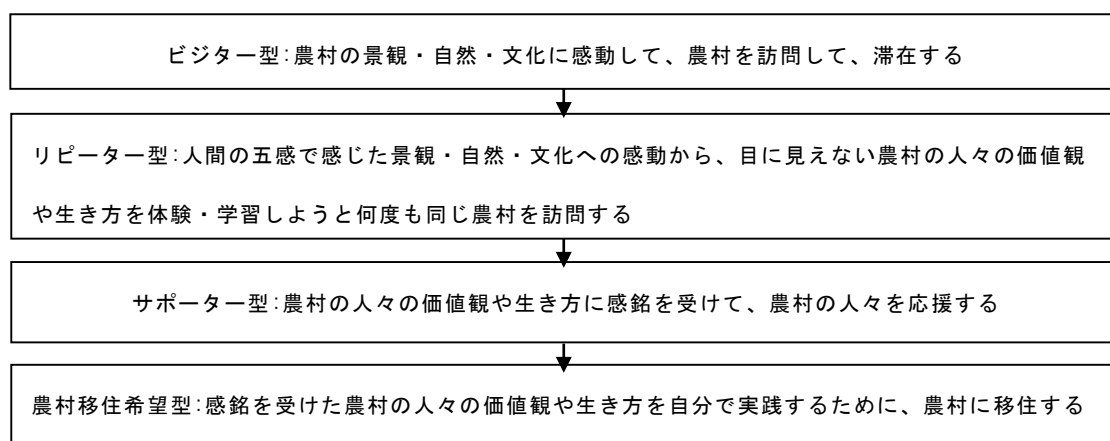


図 4 グリーン・ツーリズムの訪問客のタイプとライフスタイルの転換

(出所 『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム』より筆者作成)

カンボジア農村におけるアグロツーリズム及びグリーン・ツーリズムの事業展開には2つの組織が必要である。1つ目に訪問客を受け入れるための農業・農村体験、食

事、宿泊、特産品加工などの諸機能をネットワーク化する組織と、2 つ目にホームステイを行うグループ、地元の農作物などを使った食事を提供する食堂グループ、特産品や土産物の加工・販売グループなど、地域共同の交流施設を運営する地域経営体の2 つである。組織の担い手として、農林水産省、地方行政、農協、民間企業従事者、農業従事者、農村住民などの様々なアクター間での協同が必要である。その他に、外資系企業や NGO など外部者の視点やセンスを事業に取り込んでいくことも、外国人相手に商材・サービスを扱う際は必要になってくる。外国人が事業に携わる場合、外部者の価値観の押しつけではなく、現地でのやり方、価値観や文化などを大切にし、事業全体を通して地元住民の長期的な学びや成長に繋がるものであること、そして、持続的に現地住民が自立して事業の運営・拡大を見据えて事業を推進することが重要である。ただし、農村地域経済学の保母は、地域産業・経済の振興の方法として地域の外からの企業や組織の誘致を行う際、2 つの欠陥があることを忘れてはならないと指摘している[保母 2013:319]。第 1 の欠陥は、組織の進出も撤退も操業も、組織の採算性（営利）が唯一、最高の判断基準であって、組織側に判断や決定の裁量が委ねられている点である。農村地域が雇用の場の存続を求めたとしても、決定権を地元農村地域が持っているわけではない。第 2 の欠陥は、事業内で生み出された利益が、より採算性の高い地域や部門への投資に使われ、当該農村地域での再投資の原資にならない場合が多い点である。そのため、保母は、地域外の組織の誘致による農村開発ではなく、地域の既存の産業を伸ばす、もしくは、地域に必要なが無い産業部門を地域が主体となって創る「内発的发展」が農村地域の発展に望ましい方法であると述べている[保母 2013:319-322]。ゆえに、農村外部の企業や組織であっても、農村住民の生活改善やエンパワメントの向上、貧困問題の解決などの目標を掲げ、それらの課題解決と組織の利益創出・拡大双方の軸で事業展開していけるような、いわゆるソーシャルビジネスを推進するような組織の進出は望まれると考えられる。

また、地域社会学の田中は、アジア地域におけるまちづくりに関して以下のように述べている。

魅力ある個性輝く場所とは何か。どうして人々は繰り返しその場所へ行くのか
と言え、そこに行けばそこにしかない“光を観る”からである。そこに住み生
きている人々の営為を等身大で感じるができるからである。例えば、仕事と

職場（働く）、ホスピタリティ（福祉）と快適な居住（癒し）、文化と余暇（楽しみ）、学習と能力開発（学び）、仲間との交流（サービス、人との出会い）、自然と風土、自己関与と自己成長（創る）などのエンカウターの面白さがある。「ここで生きる覚悟を決め、自分たちの暮らしを良くし、“桃源郷”や“桜の回廊”を創りたい」と願い、懸命に取り組んでいる人々と交流するからである。まちづくりとは、こうした地域資源の中からオンリーワンを選択し、さらにシンボル化・ブランド化し、個性輝く政策（まちづくり・ものづくり・ひとづくり・組織づくり）を進めることである。[田中 2008:88]。

田中が述べているように、農村でしか味わうことのできない体験型事業を導入することは、グリーン・ツーリズムによる収益を拡大させるためにとても有効的である。筆者が実際に働いていた NGO による農村ビジネスのツアーコンテンツにおいても、訪問者が実際に伝統的産業などを体験したほうが、その後の消費活動が活発化することが多かった。実際に自分の手で、地元住民と共同作業をすることで、物への愛着が湧き、作り手やものづくりに携わる人々に共鳴し感動や学びが大きくなるので、「欲しい、買いたい」という想い気持ちが強くなると考えられる。

このような農村住民と都市住民が共に生み出すグリーン・ツーリズムは、都市と農村、伝統と革新のそれぞれの良さを織りなす特産品を「地域ブランド」として展開し、その農村を訪れた人でしか味わうことのできない特別で格別な経験を生み出すことが可能となろう。農村を舞台として、地元の人々が、地元で採れる農産物や、自然、伝統文化を駆使して、新たな商品やサービス、そしてストーリーを訪問客と共に作り出す。そして、農村での生き方や魅力に共感した人々が頻繁に訪れ、「ここで暮らしたい」や「また戻ってきたい」と思える場所として農村が機能することで、都市への出稼ぎ者は少なくなり、結果として、彼らが考える「何も存在しない農村」から「幸せに生きていける農村」へと変革する可能性もある。

ある日、筆者がシェムリアップ市街地で日本語ガイドとして働くカンボジア人男性と話していた時に印象的だったのが、まさにこのグリーン・ツーリズムのモデルと重なる意見を彼自身が持っていたことであつた。

「私は、いつか地元の農村に戻って、そこで採れるレモングラス⁽³⁰⁾の加工・生

産・販売をしたいと考えている。私は今は都市で仕事をしているが、田舎の生活が大好きなので、村の魅力をたくさんの人に伝えたい。農村からレモンガラスを使った飲料水、食べ物、その他の加工品を作って村の人と村を訪れる人に販売したい。そして、農村ツアーなども計画して、観光客に村の魅力も伝えたい」。

それでは、彼が抱く夢を実現するようなグリーン・ツーリズムを中心とした農村ビジネスを展開することが、本当にカンボジア農民を都市へ流失させない手段となりうるのでしょうか。また、それによる収益向上が、彼らを農村へ留まらせることを本当に可能にするのでしょうか。実際に人々の声でも聞かれたように、収益向上のみの農村ビジネスの恩恵は、富と地位に固執する人々を生み出し、かつ、ジェラシーの感情や相互扶助の欠如など、様々な負の心理的影響をもたらす。農村ビジネスの事業展開には、収益を上げることに以外に、参加住民の内面の充実や、事業に携わることに喜びや感動、やりがいや生きがいを見出すことができれば、活動を長続きさせることはできない。このように農村ビジネスは、人々の生活向上を担保する機能を持つ上に、彼らにとって“オンリーワン”な「居場所」を創出する上でも重要な役割を担っていると言える。

第4章 結論

1. カンボジア人の「居場所」とは

(1) 「居場所」の一般概念

広辞苑によると「居場所」の一般的な意味は、居るところ、また、座るところのことであり、自分が存在する場所のことである。また、自分の持っている能力を最も発揮できる分野を指すこともある。この他にも、「居場所」に関しては様々な定義がなされている。例えば、心理学の藤竹は、自分の能力や資質を社会的に発揮することができ、自分が他人によって必要とされる「社会的居場所」、安心してほっとすることができ、自分が自分であることを取り戻すことのできる「人間的居場所」、群集の中で匿名的な状況になることで、自分を取り戻すことのできる「匿名的居場所」の3種類を挙げている[藤竹 2000:47-57]。また安齋は、自己発揮する場としての居場所と、逃げ場としての居場所の2種類を挙げている[安齋 2003:33-37]。こうした藤竹や安齋の「居場所」研究は、個人の心理的側面からの意味付けを行っている。

人々は、自らが生きやすさを感じることができる環境、ありのままの姿や、自分らしさを表現できる場所に「居心地が良い」と感じ、その場所に拠点を置くことを決める。その場所に居ると（そこに帰ると）安らぎを覚えたり、ほっとすることができる。この意味での居場所は、藤竹が述べている「人間的居場所」であると同時に、安齋が述べている「(何か起きたときに自分が安心して戻ることができる)シェルター(逃げ場)」としての役割を果たしているとも考えられる。

また、自分が他者との関係性の中で「自分自身の存在価値」を認めるという点は、「アイデンティティ」の定義にも同様に見られる。アイデンティティは、自己同一性、自分らしさ、あるいは自分の存在確認として、いつでも安心立命できる精神的居場所や生きがい・死にがいのありかを確認したいという内的欲求であり[田中 2008:52]、このアイデンティティと居場所双方の構築は、人々が心豊かに内面の充実を図って生きていく上でとても重要である。

それでは、カンボジアにおける「居場所」や「アイデンティティ」を構築しうる要素には一体どのようなものが考えられるであろうか。地域社会学の田中は、カンボジアを含むアジア地域社会の特徴を、多様性・重層性・開放性が複合する「多元的価値

の共生社会」であるとし、人々は、ある特定の民族や組織集団、国家だけを特別視せず、みな平等・同列・同価値を持つものとして捉える精神を堅持してきたと述べている[田中 2008:51]。個々の多様性を認めつつ、他者との枠を超えて、「他者性」や「公共性」を志向するコミュニティ原理（お互い様、みんなのもの、おもいやりの心、相互扶助、互惠の原理など）によって、緩やかな横の繋がりを大切にする社会としてまとまってきた[田中 2008:iii,64]とも指摘している。これがアジア地域社会における心的共同性の価値理念として認識されており、カンボジア社会においても、このコミュニティ原理に基づく相互扶助、隣人との助け合い、愛し合い、親和性があり、地域の支え合いや人と人との付き合いを大切にする傾向が見られる。

(2)相互扶助慣行を中心とした農村の精神

デルヴェール(Delvert)は、カンボジア農村に相互扶助慣行は存在するものの、家の建築や祭事準備での協同、農繁期における労働力の交換など、いずれも何らかの目的に特化したもの、もしくは期間限定のものであり、日常的に人々の生活を支え合う性格を持たないことを指摘している[デルヴェール 2002:233-234]。また、フリング(Frings)は、カンボジアの農民は常に自己の利益を考え、例え親族であってもそこから何らかの利益を得ようとし、個人主義的であるとも述べている[Frings 1994:50]。しかしその一方で、カンボジアの農村社会は親族の繋がりがその基盤であるという議論も存在する。レジャーウッド(Ledgerwood)は、村の人々は食糧の分け合いや金銭の貸し借り、労働支援など様々な方法で助け合っていると述べた上で[Ledgerwood 1998:139]、村落内の住民の結びつきを理解する唯一の方法は、親族の繋がりをたどることであると述べている [Ibid.140]。筆者がシェムリアップ近郊の農村を訪れた際も、家の建築、田植えや稲刈りでの労働交換、家畜の監視や溜池の建設などで村人による協同作業が行われており、相互扶助的慣行が頻繁に見られた。特に、農繁期は労働交換による協同作業が必須であると住民たちは述べていた。

一方で、オベセン (Ovesen) が述べるように、農村における伝統的な自助システムがポル・ポト政権時代によって破壊された[Ovesen1996:66-67]という主張も存在するが、それをレジャーウッド(Ledgerwood)は「深刻な誤りである」[Ledgerwood 1998:139]とし、カンボジア農村には強い自助グループのようなものはないものの、親族を中心とする繋がりの中で様々な相互扶助が行われていることを示している [Ibid.140-141]。

これを物語るかのように、農村住民たちは異口同音に「村には助け合いの精神がある」と述べ、相互扶助こそが農村の良さであり価値であるという意見も多い。彼らが言う「相互扶助」は、親族や友人間、同じ居住地域内で行われることが多く、金銭の貸し借りや冠婚葬祭における協同作業など、普段の生活のあらゆる場面で、他を思いやる気持ち、気遣いや面倒見の良さを実感することができる。カンボジア人、特に農村住民の相互扶助慣行について、現在の研究は充分に行われているとは言い難いため、一概にそれらを一括りに定義づけることはできない。しかし、筆者は彼らとの交流を図る中で、彼らの相互扶助慣行にはある基準が存在するものと考えている。それは、「以前助けてもらったから、今回は自分が助ける」や、「いつも子供の面倒を見てくれるから、そのお返しにお礼をする」などというような、あくまでも「お返し」としての相互扶助がなされるような一面も見られた。「お返し」としての相互扶助ではあるが、「相手が自分に尽くしてくれたからこそ、今度は自分が相手を助ける」という一連の流れがしっかり彼らの中に根付いていることは、デルヴェールやフリングが述べるような、弱い互助機能や彼らが個人主義的であるという議論を見つめ直すきっかけになると考えられる。また、この「お互い様」に思いやり助け合うというコミュニティ原理―「農村の精神」―が息づいていることが、彼らの居場所とアイデンティティを構築する上で重要な役割を果たしており、農村に留まる人々は、このような相互扶助慣行をベースとした農村地域社会に価値や生きやすさを見出していると考えられる。

(3)カンボジア人の内発的发展と「居場所」の構築

ここでは、先述した農村での相互扶助慣行を中心とした地域社会が、カンボジア農村住民の居場所を構築するという議論に加え、カンボジア人が農村で OFB に携わる際に、どのような労働・心的環境が彼らのモチベーションを高め、内発的发展を促しうるのかを、ハードとソフトの両面から検討し、OFB を行う上で重要なポイントを提示する。OFB の事業展開をするにあたって、農村社会に生きる人々がどのような人との付き合い方を実践し、他者との関わりを構築する上でどのようなことに重点を置き、価値観を持っているのか、そして、何にやりがいや生きがいを見出しているかという彼らの心の拠点や背景を理解することはとても重要である。特にシェムリアップ州農村部で OFB を行う際は、異なる価値観を持つ外国人が農村地域に出入りする可能性も高い。その上、外部者による OFB のスタートアップの整備が必要とされる場合も考慮

し、現地住民の働きやすさ、働く喜びや充足感をどこで感じるのかなど、通常組織運営でないがしろにされがちな人々の内面を探る必要があると考える。

まずは、彼らが働く上で重要視している制度、ルール、待遇などを中心に検討する。

1 つ目は安定した給与の確保である。国が定める最低賃金はもちろん、経験値に見合う給与でなければ、彼らはより高収入が得られる職に移ってしまう可能性が高い。給与を絶えず引き上げることだけが彼らを農村に留まらせる唯一の手段とは思わない。

しかし、国連ミレニアム開発目標（MDGs）で定められているような最低限の暮らしの確保ができ、かつ、彼らが自分の人生を歩む上で選択肢が持てる、そしてその選び取った選択を実現できるような教育や様々な経験を身に着けることができる環境と収入を確保することは、彼らが長期的に働ける環境づくりとして、とても重要だと考える。

2 つ目に、事業に携わる人々が家族や親族と近い環境で仕事ができることである。幼い子供や看病が必要な家族がいる場合、彼らの面倒を見ることができる距離に労働場所があることはとても重要である。また、自分が病気がちになった場合や、親族に不慮の病や事故があった場合も、心置きなく休みが取れる環境、そして休んだ分の業務量や業務内容が後日きちんと明確になっており、職場に復帰しやすい体制が必要である。3 つ目に、彼らにとって様々な学びがある職場環境が重要である。特に、農村ビジネスで外国人をマーケットにする場合、英語を中心とした語学の習得は必要である。また、基本的な読み書き・計算能力を身に着けることは、ビジネスの円滑な運営のためにも重要である。学校を小学校・中学校レベルで終えた人々も少なくない農村では、仕事をして給料を稼ぐ場が、労働環境としてのみならず、教育の現場として機能することがとても大切である。実際に筆者が携わっていた日系 NGO が運営する工房でも、保健衛生、農業教育の他、貯蓄の重要性を学ぶ機会を設けたり、給食の実施などを行い、生きていく上で重要になる様々な学びや知識のインプットが職場に散りばめられていた。このような学びを通して彼らの内面の成長を促す施策は、彼らのモチベーションを大いに高める可能性があるといえよう。4 つ目に、扱う商材やサービスにカンボジアの伝統や暮らしが根付いていることである。カンボジアの人々は自国のものやサービスに自信が持てず、他国のほうが優れているという見方をしがちである。彼らの身の回りに存在する「何気ない日常」を商品化し（それが本物の農村の暮らしを表現しているのかどうかという議論はこの場ではしないが）、それが多くの人々に認められるようになれば、自分の地域からでも価値のあるものを生み出すことができると

いう自信と誇りの創出に繋がるはずである。

次に、カンボジア人の内発的な発展に直接関わるポイントや彼らとの関係性を構築する上で重要な視点を提示する。これらの話は抽象的で、必ずしも全ての人々に当てはまる話ではないが、実際のインタビューや、筆者が彼らと共に働いた経験を通して言えることである。まず1つ目に、目標の設定の仕方である。彼らは、比較的目の前に大きな壁が立ちただかるとすぐに諦めてしまう傾向がある。しかし、その目標や壁をまずは小さなものにし、その小さなステップを確実にこなし、成功体験を何度も実感してもらう。組織の上司やリーダーに当たる人は、きちんとその小さな達成を評価し、次はもう少し大きな目標を与える。この「目標→達成」の繰り返しが、彼らの「自分はできる」という気持ちを鼓舞し、過去の成功体験と自信を思い出すことで、その後も問題解決を図ることができるようになると思う。2つ目に、何かミスがあったとしてもすぐに怒らないということだ。特に人前で怒ってしまうと、彼らのプライドを傷付け、すぐに落ち込んでしまい、何事も諦めてしまいがちになる。それよりも、「悲しい」という気持ちをストレートに伝えること、そしてミスや失敗も「なぜそのような結果になってしまったのか」をきちんと考えさせるような話し方や気持ちの伝え方、怒り方が重要である。信頼関係がしっかりできていれば、彼らは「再び悲しませたくない」という気持ちが働き、期待に応えようとするはずである。3つ目に、彼らの努力や達成物に敏感になるという点である。彼らは、「自分が成し遂げたことに自信が持てない」や、「自分の努力や成果を恥ずかしくて他の人には伝えにくい」という面がよく見られる。しかし、その小さな変化に気づき、彼らの努力や結果が他者によって承認されたとき、彼らはとても大きな喜びを感じ、また期待に応えようとする。そして、時には想像を超えるほどの結果を残してくれることも少なくない。これらはカンボジア人のみならず、どの国籍の人々においてもモチベーションを高く保つためには必要なものである。しかし、カンボジア人、特に外国人や農村外部者と頻繁に接することがない農村の人々は、このような外部者と協同を行う上で、とても敏感に、そして慎重に、他者がどのような反応をするか、自分をどのように見ているか、自分を承認してくれるのか、という気持ちを持っていると筆者は考える。このような彼らの敏感な内面の実情を理解し、承認欲求を繰り返し満たすことで、彼らのモチベーションが高まり、農村ビジネスの事業を行う上でも農村住民が内発的・積極的に活動に携わるようになると思う。

農村住民が考える価値観や伝統を大切に、彼らと同じ目線になって物事を考え、農民自身の参加と内発的発展を促すという事業やいわゆる参加型開発と呼ばれるものは、国際協力や農村開発の現場で外部者に頻繁に求められる姿である。しかし、短期的で期限付きのプロジェクトでは、その効果というものは比較的に見えやすい数値化できる指標によってのみ評価されがちであり、プロジェクトの「成功」は、外部者や支援者の判断に委ねられることも多い。受益者とされる農村住民は、短命な事業に翻弄され、結局「何のための、誰のための」支援だったのかというプロジェクトの負の遺産のみ残される場合もある。実際に農民自身が長期的なメリットを感じ続けられるか、そして彼らが考える「成功」モデルを持続的に回していけるかどうかは、実際には数値化できないもの、すなわち彼ら自身でしか感じることでしかない「内面的変化」や「自己成長」、そしてやりがいや生きがいを見つけるという「居場所」の存在こそが、事業展開の成功の鍵となりうる。そのためには、長期的な滞在や彼らと苦楽を共にすることで、まずは農村地域社会の歴史や文化、伝統、親族集団や人間関係の特徴や背景を知ることが大前提である。その次に、彼らが何に喜びや、やりがいを感じるのか、そして彼らはどのような潜在能力を秘めていて、それをどのように活かせば最大限の力を発揮させることが可能なのかを考える。そして、彼らがそれぞれの力を発揮できる場所を構築し、イキイキと活動してもらうことにより、自信や誇りを取り戻すことを促す。この流れを繰り返す行うことで、たとえ外部者がいなくても自ら農村地域社会の魅力や価値を発信していくことに意義と幸福を感じ、多くの人々がそれに魅せられる。このような一連の流れが農村ビジネスを実行する上ではとても重要であり、うまく軌道に乗ることができれば、農村の経済的活性化のみならず、人々の内面的活性化をも可能にする。ひいては、「出稼ぎが全て」や「農村には戻る価値がない」と思っていた人々に、農村で生きる力強さや新たな居場所を構築することができると考える。このように、シェムリアップ州農村部における「居場所」を構成している要素や背景、歴史を知り、そして農村ビジネスを通じて農村住民が「そこで生きていける」、「生きていきたい」と思える「居場所」を再構築していくことが、農村の地域振興を実現するために求められていると言えよう。

2. 「留まる人々」の農村ビジネスの課題と展望

本論では、今日のカンボジア、シェムリアップ州の農村において、都市へ出稼ぎを

する人々があとを絶たない現状に触れ、人々が出稼ぎをする背景とその正負の効果を明らかにし、OFBに従事することで、出稼ぎをせずとも農村で生計を立てていくことが可能なのではないかという議論を進めてきた。人々が出稼ぎをする背景には、経済的貧困や都市への憧れ、親からの自立など、複雑な心境を捉えることができた。また、多くの人々が農業中心の生活に「生きにくさ」を感じることも、出稼ぎを加速化させる大きな要因であった。しかし同時に、彼らは生涯を終えるまで都市で出稼ぎを続けるつもりはないことにも触れ、出稼ぎをあくまでも一時的なものとして捉え、ゆくゆくは農村への帰還を希望しているのである。そこには、農村に居た頃予想していた生活とはかけ離れた苛酷な現実、すなわち、農村のゆったりとした生活とは異なる速さで進んでいく労働・生活環境、人々の心の狭さ、観光客の増減に依存するマーケット、不安定かつ一向に上昇しない給料などを含めた都市での生きにくさが、彼らを待ち受けていたためだと考えられる。また、「農村の精神」と呼べる相互扶助慣行が都市では強く機能しておらず、農村の生活にこそ生きがいや自分の居場所と呼べる快適さを人々は見出していると言える。一方、出稼ぎをしないで農村に留まる人々は、農業を中心とした生活をベースにしながらも、自宅の近くに安定した収入を得ることのできる職場が存在していたり、その他 OFB と呼べる労働に従事して収入を確保していることがわかった。OFB の多くは、農村内での住民を主な顧客としており、かつ、同業種が同地域でマーケットを争奪するため、赤字経営を強いられ、廃業に追い込まれるというリスクがある。そこで、これまでの OFB のみならず、外国人や域外に住むカンボジア人を新たな顧客として取り込むような農村ビジネスを検討することは、単一のマーケットに絞らないという点では、事業経営を長期的に持続させることができる可能性があり、農村の活性化を促すために有効だと考える。新たな農村ビジネスでは、今まで単体で行われていた、農林業、農作物を使った食品加工販売、伝統工芸品の生産販売、路面店での雑貨販売などに加え、ホームステイ事業や農村・農業体験など、新たなコンテンツを加え、農村地域全体が一体となって連携し、外部者向けに商材・サービスの提供を行うというものである。これらの事業はいわゆるグリーン・ツーリズムと呼ばれるもので、地域に潜在する地域資源、人材、伝統、文化を駆使した商材やサービスを訪問者に提供することで、農村の暮らしや価値を実感してもらい、かつ農村住民の収入向上に繋がるというものである。農村内での収入向上と利益拡大という結果が伴ってこそ、彼らは自信とやる気を取り戻し、農村の未来にも光を当てること

ができ始めるであろう。しかし、経済的成長だけでは、彼らの真の心の豊かさや喜びを喚起することができない。彼らは、労働を通して得られる様々な学びの獲得や自己成長できる環境を重要視していると考えられ、そのような機会を設けることが事業を運営する上でも求められる。また、相互扶助に基づく「農村の精神」が育まれている環境でこそ、他者との協同が活発化し、彼らの最大限の力を発揮できるとも考えられる。農村に留まる人々が大切にしている相互扶助慣行は、人々の連携や協同をうまく組織化するためにも、とても重要な機能である。

カンボジア農村では、このような事業企画や組織運営、マーケティング戦略を立て、かつビジネススキルとリーダーシップを兼ね備えたような、いわゆる「優秀な」人材が現地から生まれにくいのが現状であり、多くのプロジェクトが国際協力系の NGO や外資系企業により先導されている。それは、都市で十分な雇用機会が豊富でないにも関わらず、農村から輩出された高学歴の優秀な人材自身とその家族が、農村に戻って仕事をするのを望まないという現実も大きな要因と言える。また、多くの団体や組織が現地化を課題にしていることも要因の 1 つである。組織のトップがカンボジア人であろうと外国人であろうと、組織を長続きさせることが最大の目的であれば、現地化は確かにあまり重要ではないのかもしれない。しかし、農村ビジネスの成功を長期的な視点で考えたときに、やはりカンボジア人が自分たちの手で組織を拡大し、自らが自国もしくは自地域の魅力や価値を発信できるというのは、とても説得力があり、なおかつ同朋の心に響くのではないかと考えるのである。今後は、都市ばかりに輩出される「優秀な」現地の人材を農村に惹きつけ、地方からカンボジア人自らが地域振興を促すことができるような新たな OFB を取り入れた農村開発、そして農村ビジネスの施策が必要である。そして、人々が「居場所」と感じることのできる環境を農村地域社会で拡大させていくことが、農村ビジネスを活性化させ、人々の心に勇気と誇りを取り戻させ、地域振興と出稼ぎ者の減退という活路を見出しようとする。

本論においてシェムリアップ州を中心とした事例から明らかにした、農村に留まる人々が見出す農村の価値、農村の精神、そして OFB の未来というものは、カンボジア他州の農村でも必要とされることなのか、そして農村から都市への出稼ぎ者を減らし、彼らが農村で持続的に安定して暮らしていける有効な手段となりうるのかは不明である。また、本論では、OFB の必要性を訴えてはいるものの、実際の事業内容やその実現可能性を吟味することは一切行っていない。農村の活性化や地域振興を語る上で必

要な農村の人々への調査や、農村の精神とした相互扶助慣行、彼らの「居場所」研究も不十分である。カンボジア農村の全体像を把握し、農村における地域振興、OFBの実行を可能にするためには、農業、経済、教育などの幅広い学問からの調査、そして国際協力系 NGO や外資系企業以外にも多用なアクターを巻き込んだアプローチが必要であり、更なる研究と PDCA(Plan, Do, Check, Action)のサイクルを反復させることが必要である。

一方で、本論で焦点を当てた、農村に留まることを決断した人々が、それぞれに農村の未来を考え、次世代の若者が帰って来られる場所、帰りたくなる場所、すなわち未来の「居場所」を模索していることは、今まで貧困問題や内戦による負の遺産を彷彿とさせてきたカンボジア農村の暗いイメージを払拭してくれる、良いきっかけとなったであろう。カンボジア国内のハブ都市として今後も更なる発展が期待されるシェムリアップ州において、農村を舞台とした地域振興が活発化し、近い将来、カンボジア農村全体の発展モデルとしての機能と重要な役目を担っていくことを期待したい。

注

- (1) 2014 年 2 月 20 日に世界銀行は、「カンボジア貧困アセスメント 2013 貧困層はどこに行ってしまったのか」[世界銀行ホームページ
<http://www.worldbank.org/en/news/press-release/2014/02/20/poverty-has-fallen-yet-many-cambodians-are-still-at-risk-of-slipping-back-into-poverty>(2014/12/18 参照)より]を公表。
- (2) 総人口に占める都市人口の割合。また、過去 10 年毎の都市化率は以下。1990 年 12%、2000 年 18%、2010 年 20%[国連統計局 2013]。
- (3) 廃品回収人、臨時雇いの土木建築労働者、道端の売り子のような報酬が極めて低い職業[経済協力開発機構、以下 OECD]。
- (4) オートバイの後部に客席がついた乗り物。三輪で屋根や雨避けがついているものが多く、人も荷物もどちらも運ぶことができる。
- (5) 三輪の人力タクシー。トゥクトゥク同様人も荷物も運搬するが、近年その台数は減少傾向にある。
- (6) 2 人以上乗りをするバイクタクシー。トゥクトゥク、シクロに比べて料金は安く、1〜2 ドル前後で利用可能。
- (7) 国際協力の意志を持つ日本の NGO、大学、地方自治体及び公益法人などの団体による、開発途上国の地域住民を対象とした協力活動を、JICA が政府開発援助（ODA）の一環として、促進し助長することを目的に実施する事業。開発途上国の人々の生活改善・生計向上に直接役立つ分野で、草の根レベルのきめ細やかな活動が行われる事業を対象とする。[JICA ホームページ
<http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/what/index.html>(2014/11/12 参照)より]。
- (8) 開発途上国の課題解決能力と主体性（オーナーシップ）の向上を促進するため、専門家の派遣、必要な機材の供与、人材の日本での研修などを通じて、開発途上国の経済・社会の発展に必要な人材育成、研究開発、技術普及、制度構築を支援する取り組み[JICA ホームページ
http://www.jica.go.jp/activities/schemes/tech_pro/summary.html (2014/11/12 参照)より]。

- (9) 東南アジアを中心に熱帯雨林地域のジャングルに自生するヤシ科の植物で、日本名で「籐（とう）」と呼ばれる、200 種以上ある植物の総称。通常の木材よりも丈夫で折れにくく、曲線の加工もしやすいため、細かく裂いたものを編んでかごしたり、太いものはステッキや家具のフレームなどに使用される
[<http://www.rakuten.ne.jp/gold/ohkawakagu/rms-top/category/rattan/product-rattan.html>(2014/11/18 参照)より]。
- (10) ベトナムを構成する地方の 1 つであり、カンボジア東南部を含めたメコン下流の三角州。この地域は肥沃な農地と水利に恵まれており、農業が主要産業である。
- (11) 世界最大規模の淡水湖。乾季から雨季になると湖の面積は 3 倍以上にも広がると言われ、周囲の土地や森林を水浸しにする。
- (12) 乾季の水不足時に市の中心部にある公共水道で水をドラム缶に汲み、それを運んで行って水道の通っていない地区の住民に売る仕事。
- (13) 100 日本円＝3,835.59 カンボジアリエル。(2014 年 10 月時)
- (14) 先進国が国内の繊維産業の保護のために、開発途上国などの安い繊維製品が集中的に輸入国に流れ込むことを規制したもの。縫製製品を輸出する途上国に輸出枠を割り当てたが、カンボジアのようにもともとその枠が少なかった国は、MFA のおかげで他国との競争にさらされることなく輸出を増やすことができた [山形 2004:31]。
- (15) <http://www.humantrafficking.org/countries/cambodia>(2014/12/04 参照)
- (16) Municipality and Province Investment Information 2013[カンボジア開発評議会 2013]を参照。
- (17) カンボジアはその特徴から大きく分けて、プノンペン、平野部、トンレサップ部、海岸部、高原／山岳部の 5 つに分けることができる。シェムリアップ州はトンレサップ部に属する。
- (18) General Population Census of Cambodia 2008, National Report on Final Census Results[カンボジア計画省統計局 2008]を参照。
- (19) 絶対的貧困者の全人口に占める比率を表したもの。絶対的貧困とは、ある最低必要条件の基準が満たされていない状態を示す。一般的には、最低限必要とされる食糧と食糧以外のものが購入できるだけの所得または支出水準（＝貧困ライン）に達していない人々を絶対的貧困者と定義している[JICA ホームページ

http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC_and_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/200803_aid02_03.pdf(2014/12/20 参照)より。]

(20) A Poverty Profile of Cambodia 2004 を参照。

(21) 「貧困ギャップ」とは、貧困層の平均的所得が、貧困ラインを何%下回っているかを示す数値。この貧困ギャップでは、貧困層内の所得および支出の格差を計ることはできなかったため、貧者の支出（所得）の不足分を二乗することで、より貧しい人の状況を指標により大きく影響させようとしたのが「二乗貧困ギャップ比率」である。[JETRO ホームページ

http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Theme/Soc/Inequality/200612_nogami.html
(2014/12/20 参照) より]。

(22) National Institute of Statistics(NIS) Ministry of Planning, Report based on the Cambodia Socio-Economic Survey(CSES), Education 2007 を参照。

(23) カンボジア南東部に位置し、車でプノンペンまで約 3 時間、シェムリアップ州まで約 8 時間という距離に位置している。

(24) カンボジア南部の州で、首都プノンペンを取り囲むように位置している。

(25) C では、今後 10 年に向けて「農業プロジェクト」を実践しようとしている。これはシェムリアップ州市街地から車で 30 分ほどの農村で、農業をメインとした雇用創出を試みるものである。生産、加工、販売の全てを農村で行い、村の活性化を図るというものである。

(26) エシカル(Ethical)という言葉は、本来「道德上の」や「倫理的な」を意味する形容詞というであるが、近年英語圏を中心として「環境や社会に配慮している」様子を表す言葉として意味を持つようになってきた。地球環境に配慮する「エコロジー」を起点に、社会や人間の問題も視野に入れ、進化した流れがエシカルといえる。

(27) 長年カンボジアでツーリズム関係の業務をされてきた K の代表である N 氏へのインタビューでお伺いした内容。

(28) マネー資本主義に依存する近代的な世界や都市部には限界がある。里山資本主義は、「里山には、水、食料、エネルギーが全て手に入り、地域独自の資源を持続可能なサイクルで活用していけば（いわゆる 6 次産業のようなモデルを実現すれば）地域は活性化かつ長生きする」という考えに基づいている[藻谷

2013:12]。

- (29) 11 世紀末に造られたアンコール王朝時代の最大の貯水池。今も豊かな水を湛え、多くの種類の魚が生息している。週末には地元の人がピクニックに訪れる。
- (30) 東南アジアに多く生息しているハーブ。レモンのような爽やかな風味があり、香料として食品や香料として使用される。

表2 インタビュー団体・対象者一覧

組織名	個人名	組織または個人の活動概要
A	a	人身売買の被害に遭う子供たちをなくすことをミッションに掲げ活動を行っている。シェムリアップ州では、貧しい人々に雇用と収入向上の場を提供するべく、工房で伝統民芸品の製作・販売を行っている。
	b	
	c	
	d	
	e	
	f	
B	a	カンボジアの伝統工芸品の製作・販売を通して農村に長期的な雇用創出と人々に技術を身に付けてもらうことをミッションに活動している。
	b	
	c	
	d	
C	a	シェムリアップ州を訪れる観光客向けにクッキーを中心としたお菓子等を製造・販売している。カンボジア人の雇用創出、収入向上、カンボジア人の自立等を目標に活動をしている。
	b	
	c	
	d	
	e	
	f	
	g	
	h	
	i	
	j	
D	a	ハーブを使用したカンボジアの伝統医療にヒントを得て、アロマ製品や石鹸等のお土産品を生産・販売している。カンボジアの地元の素材を使い、地元の人々が製品を作り、地元のための組織を作るというミッションのもと活動を行っている。
	b	
	c	
E	a	カンボジア人が自分たちが作ったもので誇りを持てるものを作るというミッションのもと、洋服やファッション関係に特化した商品の生産・販売を行っている。
	b	
	c	
	d	
	e	
F	a	カンボジア人の洋裁技術の普及と職業訓練を目的に設立され、カンボジア産のスカーフ「クロマー」を用いた商品の生産・販売を行っている。
	b	
G	a	カンボジア産の胡椒の生産・販売を行っている。主に日本人のマーケットを中心にオーガニックで品質の良い商品を取り扱っている。
	b	
	c	
	d	
H	a	復興をめざすカンボジアで、幼児期の子どもたちが安心して暮らせる環境をつくるための保育活動と、女性の自立を支援するための伝統織物の技術訓練活動に取り組んでいる。
	b	
	c	
I	a	洋服関連の商品を生産・販売している。洋裁技術の普及と収入向上、カンボジア人のエンパワメント向上等の目標の下活動を行っている。
	b	
	c	
	d	
J	a	農村から都市へ出てきた若者の中で、失業している人や貧困にあえぐ人を対象にしたソーシャルビジネスを行っており、レストラン経営やお土産品の生産・販売等様々な活動を行っている。
	b	
K	a	シェムリアップから南東に約170kmのコンポントム州に存在する遺跡と、その遺跡周辺の人々を舞台に繰り広げられる、新しいツーリズムの在り方と持続可能な地域振興を探る活動を行っている。
	b	
	c	
	d	
	e	
	f	
	g	
	i	
L	a	シェムリアップ州市街地で、観光客向けの商品を扱ったお土産屋で働いている。
	b	
M		シェムリアップ州市街地で建設業を営んでいる。
N	a	シェムリアップ州市街地でトゥクトゥクのドライバーとして働いている。
	b	
	c	
	d	

(出所 筆者による現地でのインタビューより作成)

参考文献

安齋智子

2003 「「居場所」概念の変遷」『発達』24(96):33-37。

APDA (財団法人アジア人口・開発協会)

2007 『人口問題が農業・農村環境に与える影響に関する基礎調査—カンボジア王国—』

荒木康紀

2006 「カンボジア農林業の現状と課題」『国際農林業協力』29(2):44-51。

安達生恒

1980 『伝統農民の思想と行動』日本経済評論社。

デルベール、J

1967 「カンボジアの農民」高橋保編『アジア経済』アジア経済研究所。

2002 『カンボジアの農民—自然・社会・文化』及川浩吉訳、風響社。(Delvert Jean, 1958, *Le Paysan Cambodgien*. Paris: Mouton.)

堂目卓生

2009 「アダム・スミス 『道徳感情論』と『国富論』の世界」中公新書。

EIC (Economic Institute of Cambodia)

2006 『Cambodia Agriculture Development Report』

Frings, Viviane

1994 Cambodia After Decollectivization(1989–1992), *Journal of Contemporary Asia* 24(1):50-66.

藤竹暁

2000 『居場所を考える』至文堂。

福井清一、ルチリアカン

2013 「出稼ぎが、医療費と子供の栄養状態におよぼす影響について -CSES 2009 を用いた計量分析-」『生物資源経済研究第18巻』pp.131-140、京都大学。

Giddens, A

1994 *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*. Palo Alto, CA: Stanford

University Press.

初鹿野直美

- 2006 「カンボジアの工業化—自由化の渦中にある製造業とその担い手—」天川直子編『後発 ASEAN 諸国の工業化—CLMV 諸国の経験と展望—』pp.21-54、アジア経済研究所。

廣畑伸雄

- 2004 『カンボジア経済入門—市場経済化と貧困削減—』日本評論社。

保母武彦

- 2013 『日本の農山村をどう再生するか』岩波現代文庫。

ホガード・ブラー

- 1998 『農村開発の論理 [上] —グローバルゼーションとロカリティ—』岡橋秀典・澤宗則監訳、古今書院。(Keith Hoggart and Henry Buller, 1987, *RURAL DEVELOPMENT A Geographical Perspective*. London: Routledge.)

板垣啓四郎

- 2006 「東南アジアにおける食料・農業生産の国際分業化と後発国の役割」『国際農林業協力』29(2):16-21。

JETRO (日本貿易振興機構)

- 2013 『アジア新興国のビジネス環境比較—カンボジア、ラオス、ミャンマー、バングラデシュ、パキスタン、スリランカ編—』

JICA (独立行政法人国際協力機構)

- 2010 『カンボジア王国貧困プロファイル調査 (アジア) 最終報告』

小林知

- 1972 『カンボジア村落世界の再生』京都大学学術出版会。
2004 「カンボジア・トンレサープ湖東岸地域農村における生業活動と生計の現状—コンポントム州コンボンスヴァーイ郡サンコー区の事例—」天川直子編『カンボジア新時代』pp.275-325、アジア経済研究所。

Ledgerwood, Judy

- 1998 Rural Development in Cambodia: The View from the Village In Cambodia and the International Community, *The Quest for Peace, Development, and Democracy*. In Frederick Z. Brown and David Timberman (eds.), pp.127-147. Singapore: Institute

of Southeast Asian Studies.

Maung Maung Lwin

- 2011 「Investigating Village Socio-economic Condition and Possibility of Poverty Reduction through Sample Survey(The Case of Rattan Handicraft Village of Siem Reap, Cambodia)」『海外事情研究』39(1):63-86。
- 2013 Generation of Employment and Income through English(The Case of Tourist Industry in Siem Reap, Cambodia), In Jeffrey Morrow (ed.), *Journal of Economics, Kumamoto Gakuen University* 19(3):99-137.

宮崎 猛

- 2006 『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズムー地域経営／体験重視／都市農村交流』昭和堂。
- 2011 『農村コミュニティビジネスとグリーン・ツーリズムー日本とアジアの村づくりと水田農法』昭和堂。

水野正己・佐藤寛

- 2008 『農村と開発ー農村開発論再考ー』アジア経済研究所。

藻谷 浩介

- 2013 『里山資本主義ー日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店。

中西 真知子

- 2009 『再帰的近代社会ーリフレクシブに変化するアイデンティティや感性、市場と公共性』ナカニシヤ出版。

小口 瑛子

- 2012 「農業から転換しつつある社会における「上昇志向」の発達：カンボジア・シェムリアップ州都近郊農村における大学進学を選好」「*相関社会科学*」編集委員会 編『*相関社会科学* 22 号』pp.43-63、東京大学。

小國 和子

- 2008 「農村開発フィールドワークと開発援助ー東南アジアにおける事例からー」水野正己・佐藤寛編『*開発と農村ー農村開発論再考ー*』pp.221-246、アジア経済研究所。

Ovesen, Jan

- 1996 When Every Household in an Island: Social Organization and Power Structures in

Rural Cambodia. Stockholm: Department of cultural Anthropology, Uppsala University and Sida.

ロバートソン、R

- 1997 『グローバリゼーション—地球文化の社会理論』阿部美也訳、東京大学出版会。(Robertson, R. 1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*. London: Sage.)

佐藤奈穂

- 2004 「農村における女性世帯に対する親族と共同体の役割—カンボジア シェムリアップ州 タートック村を事例として—」『龍谷大学経済学論集（民際学特集）』43(5):53-72。
- 2009 「カンボジア農村における子の世帯間移動の互助機能」『東南アジア研究』47(2):180-209。

田中秀章

- 2012 『まだ“エシカル”を知らないあなたへ—日本人の11%しか知らない大事な言葉』産業能率大学出版部。

田中豊治

- 2008 「アイデンティティとアジア・コミュニティ」浦田義和編『アジア・コミュニティの多様性と展望—グローバルな地域戦略』pp.50-101、昭和堂。

上田広美、岡田和子

- 2009 『カンボジアを知るための60章』明石書店。

矢倉研二郎

- 2005 「カンボジア農村における工場への出稼ぎと子供の就学水準の関係—相互促進関係と男女間教育格差への影響—」『国際開発研究』14(2):33-49。
- 2008 『カンボジア農村の貧困と格差拡大』昭和堂。

山形辰史

- 2004 「経済成長と貧困・雇用：Pro-Poor Growth 論の系譜」絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生編『シリーズ国際開発第1巻 貧困と開発』pp.21-36、日本評論社。

山川貴裕

- 2014a 「カンボジアの農村における社会経済状況—シェムリアップ州タットレイ村

の事情―』『熊本学園大学経済論集』 20(1):59-101。

- 2014b 「カンボジア農村部における家内産業の可能性―シェムリアップ州ポピセ村におけるラタン手工芸品産業について―」 Maung Maung Lwin 編著『海外事情研究』 42(1):1-23。

Summary

Migrant workers and rural business in Cambodia —The possibility of local development in rural areas, Siem Reap district—

The purpose of this study is to suggest that the rural business in rural areas in Siem Reap, Cambodia is very effective in reducing the number of migrant workers moving from rural to urban areas.

It is said that the poverty rate of Cambodia has been recently decreasing, while attracting the world as a new raising nation. But on the other hand, this heavy concentration of business and population in Cambodia has created a big gap between rich and poor people. A large number of poor people go outside of rural areas as migrant workers because they don't have enough chances to get stable job and enough money through a mainly agricultural life.

The same trend has occurred in Siem Reap district, especially in Siem Reap central city. Migrant workers go to Siem Reap city and they become involved in tourist business. Do to the grate and very famous Angkor ruins, Siem Reap is blessed with tourism. With a big boom in construction, an increase of gorgeous hotels and restaurants and so many souvenir shops for foreigners...it appears that Siem Reap has many employment opportunities. But for migrant workers from rural areas, getting a stable job and earning good salary is difficult. Sometimes, they are forced to work under very harsh environment with very low salary. Some people borrow money from others and then they cannot even remit money to their family. On the other hand, family members who are waiting for migrant worker's return always feel loneliness, and also sometimes think that working situations are very cruel. Because of these circumstances, only the survivors of emigration can enjoy the benefits but others receive negative damages of emigration.

Rural business will be a key to success that dissuades poor people moving to cities. It enables rural areas' human, natural, cultural and traditional resources to encourage regional vitalization and local development. Now in Siem Reap, tourists' purpose of visiting is just

visiting Angkor ruins. But new rural business will create new tourism thorough called as “Green tourism” and become popular among people near the future. To succeed in this model, not only local people’s participation in the project is required, but also we need 3rd actors like the United Nations, international NGOs, foreign-owned corporations, etc. to assist. However, the most important thing is motivation and empowerment of local people. Even if we create very attractive souvenirs, tours, various services for visitors, any projects would be a failure without the happiness and satisfaction of local people. To know the mindset and spirit of villagers can motivate local people and make local development successful.

謝辞

5年間の大学生生活の集大成として、今この論文を完成させられたことに一安心すると共に、自分が憧れ続けてきた国際協力の現場や、大好きになったカンボジアの地でこれから密接な関わりを持つことや研究を進めることが少なくなると思うと、どこか寂しい気持ちも込み上げてくる。

本論を執筆するにあたって、多くの方々のお力添えを頂いた。本論は、2013年3～12月にかけて筆者が現地で長期インターンシップに参加した際の活動や日常生活、また、2014年8～9月にかけて行ったインタビュー調査を踏まえた内容となっている。筆者がインタビュー依頼をした日系企業、NGO関係者の方々には、勤務中でご多忙の中、何度もインタビュー調整をして頂き、たくさんのお時間を割いて頂いた。学生の無理な申し出にも関わらず、親身に対応をして下さり、本論の執筆活動を応援して下さい下さった方々に、この場をお借りし、改めて感謝の旨を申し上げたい。特に、現地での通訳をして下さったコーン氏には、当日の通訳のみならず、様々な交渉や関係者との対応など、無理なお願いをする場面がたくさんあったが、最後まで丁寧に仕事を引き受けてくださり、感謝の気持ちでいっぱいである。

筑波大学人文社会科学研究科の関根久雄教授には、長期に渡って個別指導やゼミでの熱いご指導をして頂き、感謝してもしきれないほどである。突然の相談や面談にも優しく、いつも笑顔で対応して下さい、先生のご指導があったからこそ本論を最後まで書き上げることができた。

関根ゼミの仲間たちは、率直なコメントや批判をしてくれ、共に闘ってきた戦友でもある。途中で悩んだ時も、気持ちが途切れそうになった時も、仲間たちがいたからこそ最後までめげずに執筆を続けることができた。

最後に、カンボジアへの渡航を許してくれ、様々な面でサポートしてくれた両親と家族にも感謝の念を申し上げたい。就職や卒業を先延ばしにし、大学4年次を休学してカンボジア渡航を決断する際は、勿論真っ向から反対されるかと思いきや、将来と今後のためにも良い経験になると、全力で後押ししてくれた。両親の寛大な心があってこそ、この論文を執筆することができ、将来の進路も決断することができた。

改めて、本論を執筆する上で支えてくださった上記の皆さまに、感謝の意を表したい。